

平安宮朝堂院跡
——京都市上京区主税町所在——

平安京跡研究調査報告

第9輯

財團法人 古代學協會

昭和58年

目 次

はじめに	眞 1
第1章 調査の経過	1
第2章 層序と検出遺構	5
1. 層序	(5)
2. 平安時代の遺構	(6)
3. 江戸時代以降の遺構	(7)
第3章 出土遺物	8
1. 平安時代の遺物	(8)
2. 江戸時代の遺物	(48)
第4章 出土瓦について	52
おわりに	58

図版目次

図版第1 発掘前調査地全景；石垣	図版第13 出土遺物 丸瓦(2)
図版第2 北部遺構検出状況；東北部遺構検出状況	図版第14 同 上 丸瓦(3)
図版第3 東部遺構検出状況	図版第15 同 上 平瓦(1)
図版第4 煙灰岩窓断面；煙灰岩窓・柱穴3	図版第16 同 上 平瓦(2)
図版第5 柱穴3；柱穴2	図版第17 同 上 平瓦(3)
図版第6 D1瓦窓	図版第18 同 上 九州系瓦
図版第7 E5瓦窓	図版第19 同 上 文字・記号瓦
図版第8 粘土採掘坑	図版第20 同 上 蝶斗・面戸瓦
図版第9 出土遺物 軒丸瓦(1)	図版第21 同 上 鴉尾、磚
図版第10 同 上 軒丸瓦(2)	図版第22 同 上 磚、土壁、煙灰岩
図版第11 同 上 軒平瓦	図版第23 同 上 土器・土製品類、銅錢
図版第12 同 上 丸瓦(1)	図版第24 同 上 陶磁器類

挿図・表目次

	頁
第1図 調査地位置図	2
第2図 調査地グリッド配置図	3
第3図 造構平面図(1)	4
第4図 同上(2)	5
第5図 層位断面図	6
第6図 柱穴列実測図	7
第7図 軒丸瓦拓影・実測図(1)	9
第8図 同上(2)	10
第9図 同上(3)	11
第10図 同上(4)	13
第11図 同上(5)	14
第12図 軒平瓦拓影・実測図(1)	16
第13図 同上(2)	17
第14図 同上(3)	18
第15図 丸瓦拓影・実測図(1)	20
第16図 同上(2)	21
第17図 同上(3)	22
第18図 平瓦拓影(1)	23
第19図 同上(2)	24
第20図 同上(3)	25
第21図 同上(4)	26
第22図 同上(5)	27
第23図 同上(6)	28
第24図 同上(7)	29
第25図 同上(8)	30
第26図 同上(9)	31
第27図 同上(10)	32
第28図 平瓦拓影(1)	33
第29図 同上(14)	34
第30図 同上(14)	35
第31図 同上(14)	36
第32図 同上(15)	37
第33図 同上(15)	38
第34図 九州系瓦拓影(1)	39
第35図 同上(2)	40
第36図 同上(3)	41
第37図 九州系瓦叩き目復原図	42
第38図 文字瓦拓影	43
第39図 文字・記号瓦拓影	44
第40図 貝斗瓦拓影・実測図	45
第41図 面戸瓦拓影・実測図	46
第42図 鬼瓦実測図	46
第43図 鳥尾拓影・実測図	47
第44図 灰岩石材実測図	48
第45図 土壁混入土器実測図	48
第46図 軒丸瓦拓影・実測図(6)	49
第47図 軒平瓦拓影・実測図(4)	50
第48図 土器類実測図	51
第49図 出土軒瓦一覧図(1)	53
第50図 同上(2)	54
第51図 同上(3)	55
第1表 瓦渦出土瓦類の重量比	57

例　　言

1. 本書は財團法人古代學協會・平安博物館が、大和銀行株式会社の委託を受けて昭和56年に実施した、大和銀行千本支店の店舗新築に伴う発掘調査の報告書である。
2. 掘図の作成は植山 茂、武藤潮子、渡辺 仁、田中 聰が行なった。図版写真の現像・焼付は平安博物館技術室の水口 薫による。
3. 遺物の実測図は原則として3分の1である。図版の遺物写真は縮尺不同である。
4. 本書で使用したレベルは海拔標高、方位は真北である。
5. 本書の編集・執筆は植山が行なった。

はじめに

京都市中京区および上京区にかかる、千本通と丸太町通の交差点付近は、平安宮の中心となる大極殿跡にあたる。この千本丸太町交差点のほぼ東南角に所在する大和銀行千本支店では、店舗の新築計画により、その事前の埋蔵物調査を京都市文化観光局文化財保護課の指導もあって、昭和56年に平安博物館に委嘱された。この地点は大極殿を正殿とする、朝堂院北部の龍尾壇付近にあたると推定されている。

平安博物館では昭和40年に、古代学協会としてこの敷地の一部をトレンチ掘りによって調査を行なったこともあり、この委嘱を受けて、大和銀行および建築を担当する大成建設の3者で協議を重ね、その結果、遺跡の重要性を考慮して、掘削予定部分を全面発掘することとして契約書を交した。調査の要項は以下のとおりである。

調査主体 平安博物館館長 角田文衛

調査担当 平安博物館考古学第三研究室 下條信行、植山 茂、定森秀夫

調査地 京都市上京区千本通丸太町下ル主税町1140番地

調査期間 昭和56年10月13日～同12月19日

調査面積 460m²

現地調査は主に植山が担当し、定森が随時加わった。現場調査の補助および作業員として次の諸氏の協力を得た。

調査補助 秋定正之、小関 徹、鈴木 健、高井順子、寺内正明、久末忠司、深野光康、福士順子、横田洋三

作業員 赤沢俊男、五十嵐彰男、五十嵐宏、木村謙次、小原祥市、橋本庄次、橋本俊夫、平山聖観、福田文治、三浦信一、安田秀男、山中貞男、吉田龍太郎

調査はまず旧店舗建物の重機によるコンクリートの基礎および地下室部分の撤去作業の立会から開始した。これが約1週間続き、10月26日から本格的に発掘調査に入り、12月19日にはすべての現場調査を終えた。整理は昭和57年度に行ない、次の諸氏の補助を得た。

大元利彦、岡田富美子、里内知巳、田中 晃、武藤朝子、渡辺 仁

なお、発掘調査および整理作業の経費は原因者である大和銀行が負担されたことを明記し、感謝するしたいである。

第1章 調査の経過

調査地の北辺は駐車場として使われていたもので、昭和40年にはこの部分で調査が行なわれた。この調査では遺構は検出されず、若干の遺物が採集されたのみであったが、地山の高さが



第1図 調査地位置図

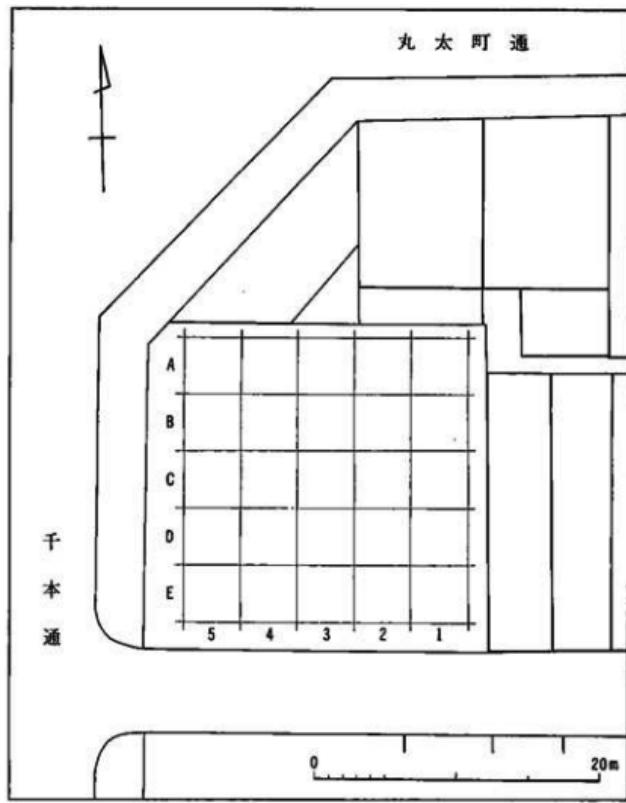
確認されていた。また千本丸太町交差点周辺で平安博物館が行なってきた調査によても、地山は現地表からあまり深くないことが知られている。

このため調査は、基礎および地下室部分の撤去作業段階から立会を始めた。旧店舗は第2次大戦後の鉄筋コンクリート造りの建物で、柱基礎および地中梁部分は布掘りによるものであった。したがってこの建物による搅乱は全面におよぶものではなかったが、基礎工事はかなり大きかりなもので、これによる搅乱は地山面まで達していた。地下室床面は現地表下約3mで、完全に地山を穿っており、この部分では何らの遺構・遺物も検出されなかった。

なお、地下室の解体を進めるうちに、東北部分では地下室壁の外側にもレンガ造りの壁が現れ、南西部分でも外側に漆喰塗の階段などが検出された。このため、銀行店舗以前の建物にも地下室があり、銀行の地下室はこれにほぼ重なるように造られたものと思われる。これにより地下室による搅乱部は一そう広いものとなった。この部分は遺構等のないことを確認した後、排土の処理場所とした。

撤去作業中にも多数の平安時代の瓦類が採集された。特に後に設定したグリッドのE5付近では、地中梁の栗石中やその下部に多く、この部分だけでコンテナパット10箱分以上の瓦類が採集された。

柱基礎や地中梁等を撤去した後、コンクリート片やレンガ片の混じる表土は重機により排土した。この時点で、北寄りの部分に東西方向の石列が認められ、東寄りの部分には瓦と焼土を



第2図 調査地グリッド配置図

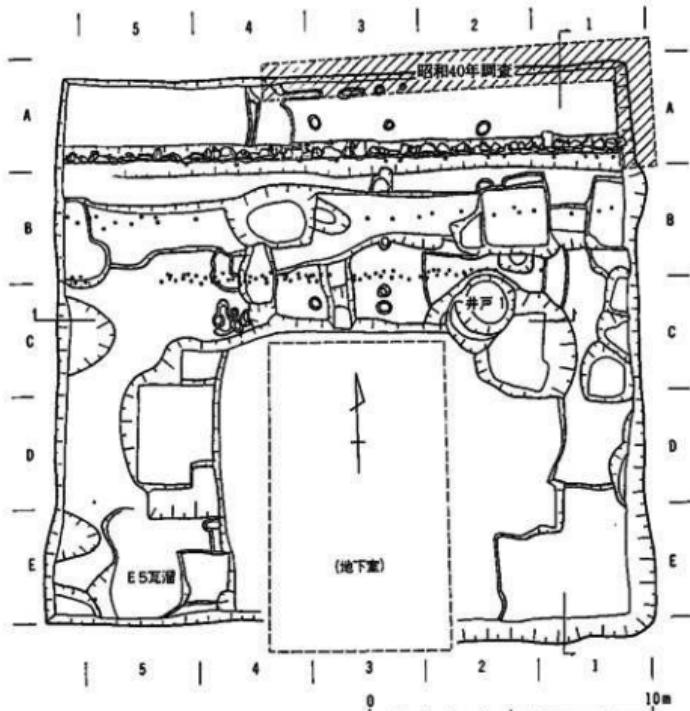
含む土が現れていた。

表土を剥いだ段階から本格的な調査に入り、まず調査地を覆う一区画4m四方の方眼（グリッド）を設定し、東北角より、西に1～5、南へA～Eの符号をつけた。グリッドは敷地にあわせた任意のものである。

発掘は表土下に現れた石列を明らかにすることから始めた。この石列はほぼ東西方向に、調査区の東端から西端までを通して検出され、その南側のガラス片等も混る埋土を掘り下げるとき、落差約1mの石垣であることが判明した。

ついでE5付近の瓦が多く集まっている部分を明らかにしていった。この部分は不定形の輪郭の、やや浅い窪みになっており、比較的近年の瓦と平安時代の瓦が混在している状態であった（E5瓦窪）。

一方D1付近の施肥土が認められた部分の精査も行なった。ここでは表土直下が平安時代の遺



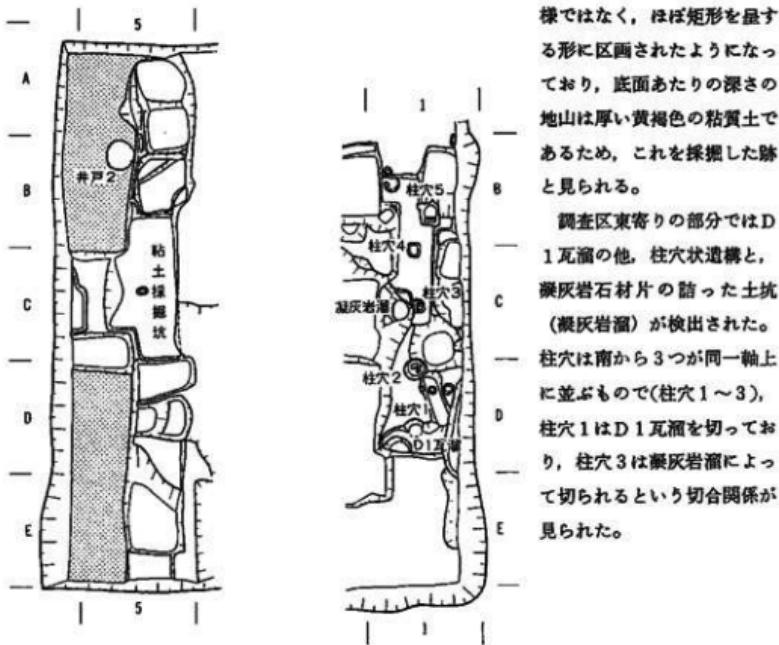
第3図 遺構平面図(1)

物包含層になっており、焼土のある部分は火災後の廃瓦等を処理した瓦窓の一部と見られる(D 1 瓦窓)。

石垣と地下室跡の間では表土下に凝灰岩の細片を多く含む褐色土層が広がっていた。あまり多くはないが、含まれている遺物は平安時代のものばかりであった。この層は厚さ1~5cmで、その下層は地山まで数枚に分層できるがいずれも厚さ数cmで含まれる遺物もほとんどなく、地山に至っている。

またこの部分には大小多数の掘り込みが検出されたが、いずれも江戸時代以降の遺物を含んでいるものであった。また地下室跡の東北角部では素掘りの井戸が検出された(井戸1)。

調査区西寄りの部分では、北端から南端まではほぼグリッドの4列と5列の境を肩として地山が大きく掘り込まれておらず、埋土中には平安時代の瓦類と江戸時代末頃の遺物を多く含んでいた。この部分を掘り下げていくと、最も深いところで地山の肩から約2.5m、現地表面からは約3.5mとなった。調査地の西は千本通に面しており、全面掘り下げることは危険が伴うため、西半部分は途中で掘り下げを断念した(第4図左の調査部分)。この大きな掘り込みの底面は一



第4図 遺構平面図(2)

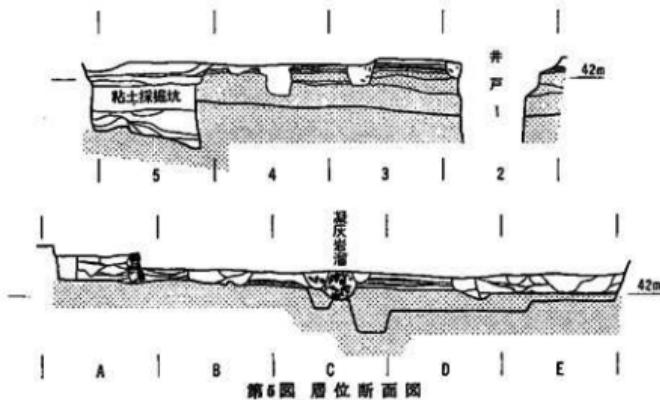
第2章 層序と検出遺構

1. 層序

調査地付近の地山は、先に触れたように本来、現地表面に近い高さを保っているようである。このため後世の削平を受けていることが多く、千本丸太町交差点周辺では平安時代の遺構の検出例がほとんどない。今回の調査地内でも地山が高くなっているところは標高約42.5mである。表土下から地山直上までは45cm程度の厚さであったが、地下室跡の北面から東面における断面観察では比較的連続する水平な層序が認められた。各層はいずれも厚さ数cmのもので、含まれる遺物も少ないので細かな時期判定は困難であったが、標高42.6mあたりに分布する厚さ2~5cmの褐色土層には凝灰岩の細片が多く含み、少ないながら遺物は平安時代と見られるものばかりであったため、この層以下が平安時代、これより上層が遺物から見て江戸時代以降に相当すると思われる。凝灰岩片を含む層は断続的ながらC 1からC 4の、地下室跡と地中堀方の溝の間で認められ、部分的ながらD 1にも広がっており、朝堂院廃絶後の整地層か

様ではなく、ほぼ矩形を呈する形に区画されたようになってしまっており、底面あたりの深さの地山は厚い黄褐色の粘質土であるため、これを採掘した跡と見られる。

調査区東寄りの部分ではD 1瓦窓の他、柱穴状造構と、凝灰岩石片の詰った土坑（凝灰岩窓）が検出された。柱穴は南から3つが同一軸上に並ぶもので（柱穴1~3）、柱穴1はD 1瓦窓を切っており、柱穴3は凝灰岩窓によつて切られるという切合関係が見られた。



と思われる。なお地山（第5図網目部分）は、上方が砂利・砂・粘質土などの異なる層が交互に比較的薄く堆積し、下方は厚い黄褐色の粘質土となっており、堆積層は緩く西から東、北から南へ傾斜している。

2. 平安時代の遺構

厳密に平安時代と断定しうるものはD 1瓦溜だけであるが、D 1・C 1の柱穴列も形状などから平安時代に属するとと思われ、凝灰岩溜も一応ここに含めておく。

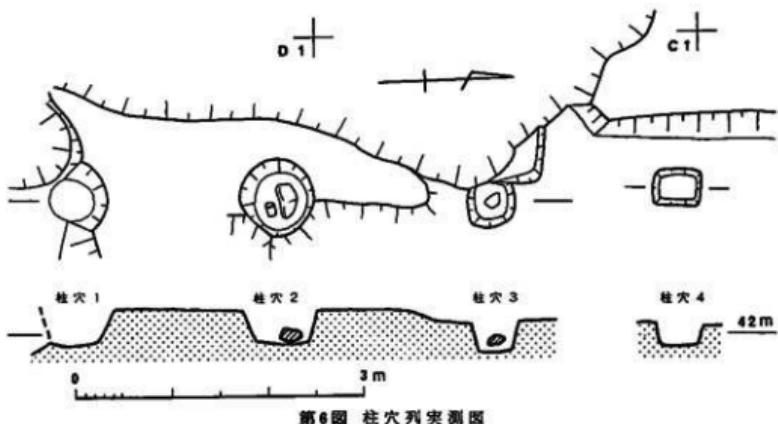
(1) D 1瓦溜

この瓦溜は单一のものではなく、溝状の部分と大きな掘り込みの一部と見られる部分にわけられるが、後世の搅乱などにより同時あるいは前後の関係が判然とせず、出土瓦には接合できるものもあったため、一括して扱う。溝状の部分は幅約60cm、深さ約40cmで、底面は北から南へやや傾斜している。一方の部分は大きな掘り込みの北端部にあたると見られる。E 1には地山を掘り込んだ下水管やレンガ片の混る搅乱坑があり、大きく乱されていたが東壁際にわずかに瓦片や焼土を含む部分が認められ、一連の瓦溜の一部と思われる。どちらの部分にも瓦類が密に詰り、焼けた土壁や凝灰岩片なども多く混っていたことから、火災後あまり時間を置かず、廃瓦等を処理したものと見られる。なお瓦の出土状態から、投棄は北側からなされているようである。

(2) 柱穴列

柱穴は南北方向にB 1からD 1にかけて5個所で検出されたもので、南から柱穴1～5とする。柱穴1～3は同一軸上にあり、間隔もほぼ等しいが、柱穴4・5は平面も方形で、根石なども認められず、柱穴とするには疑問も多い。

柱穴1はD 1瓦溜を掘り込んで設けられ、埋土に焼土は混っていない。柱穴2はD 1瓦溜の溝状の部分の北端にあり、若干瓦溜を切っていた。底部にはやや扁平な石が置かれ、瓦片も詰



第6図 柱穴列実測図

められていた。柱穴3も底部に石があり、西側を凝灰岩層によって切られていた（図版第4下）。柱穴1～3はいずれも逆円錐台状の掘方で、間隔は柱穴1と柱穴2が2.2m、柱穴2と柱穴3が2.3mを測る（心々）。柱穴3の北には同一軸上に並ぶ掘り込みではなく、柱穴列の東・西・南は大きく擾乱されているため、この柱穴が建物であるか解であるかなどは判断できないが、いずれにしても大規模なものではなかろう。

(8) 磨灰岩層

仮にこのように称するが、その性格はわからない。遺構は銀行以前の地下室によって大部分毀されており、残った部分は深さ約1m、奥行約30cmであった。ここには拳大から人頭大以上の磨灰岩石材片が詰っており、若干の瓦片も混っていた。なお先に記した磨灰岩細片を含む褐色土層との直接の関係は不明であるが、ほぼ同時期頃かと思われる。

3. 江戸時代以降の遺構

江戸時代以降の遺構として、井戸・粘土採掘坑・杭列・石垣・瓦窯などがある。この中では井戸1が比較的古く、江戸時代初期頃に位置づけられるものである。井戸1は径約2mの素掘りの井戸で、南半は地下室によって截ち切られていた。深さは地山の肩から約4m、標高約38mであるが涌水のため完全に確認はできなかった。埋土中には第48図1～12の土器類や平安時代の瓦類も混っていた。

先に記したように地山には厚い粘質土層があり、調査区西端部の大きな掘り込みは、壁土などに用いるためこの粘土を採掘したものと見られる。掘り込みの底部は地山を掘り残した高さ10～20cmの土手で区画されたようになっている。各区画内にはほぼ平坦であるが、角の部分が掘り残されたように高まっているところもある。掘り込みの深さは東寄りが深くなっている。埋土には多量の陶磁器片を含んでおり、平安時代の瓦類も混っている。この掘り込みの西寄りは

掘り下げを中断したがC 5では確認のため西端まで掘り下げた。ここでは地山直上が平安時代の遺物のみを含む褐色土になっていたが、これは遺物包含層のブロックがそのまま落ち込んだものであろう。なおこの粘土の採掘が行なわれたのは埋土中の焼塙壺や陶磁器から、18世紀末頃かと思われる。

井戸 2 はこの採掘坑埋土を掘り込んで設けられた内径約 1 m の、側に河原石を積んだ井戸である。井戸内出土の遺物は採掘坑埋土中の遺物と同様で、時期差は感じられない。

杭列は調査区北半で、東西方向に 3 条検出された。南側の列は杭の間隔がかなり密になっている。北側の列は石垣の面にはば添っているが、西寄りでは石の下になっている。杭はいずれも径 5 cm 内外である。

石垣は幅 30~60 cm 程度の花崗岩を 3 段に積んだもので、最下段の石は地山をわずかに掘り込んで据えられている。地山の高さは石垣の南北ではほとんど変わらない。石垣の裏込土や盛土中には江戸時代以降の瓦類や陶磁器類が含まれ、上面にはガラス片などが入った掘り込みが多数あった。

E 5 瓦溜は多量の平安時代の瓦と近年の瓦が混在しており、瓦の間には隙間が多くあまりしまってないもので、おそらく銀行旧店舗が建てられる頃に、あたりに散在していた瓦類を集めて埋め立てたものであろう。

第3章 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナーパットで約 300 箱分であった。その大部分は瓦類で、他に陶磁器類と若干の土器類および凝灰岩石材などがあり、時期はおよそ平安時代に属するものと江戸時代以降のものに分けられる。

1. 平安時代の遺物

平安時代に属する遺物は大部分が瓦類で、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・面戸瓦・鬼瓦・鈎尾および鶴がある。他に基壇の化粧に用いられると思われる凝灰岩片や土壁の破片、および土師器・須恵器・施釉陶器などもある。ただし土器類はほとんど細片で、時期を限定するのは困難である。以下は瓦類を中心に記述していく。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は前期より後期に至るものがあり、前期と中期のものには綠釉品が目立つ。第 7 図 1・2 は前期の綠釉品である。いずれも胎土には多く砂を含む。2 は硬質の焼成で、釉は明緑色を呈している。1 は火を受けており、全体にもろくなっている。3 は大阪府吹田市の岸部瓦窯産と見られる複弁 8 葉蓮華文の軒丸瓦である。胎土には細かい砂を含み、やや軟質の焼成で表面黒色、内部淡灰褐色を呈している。なお同一個体と見られる中房部の破片もある。4 は全体のわかる同範例が見あたらいため確かではないが、盛り上った中房の複弁 8 葉蓮華文

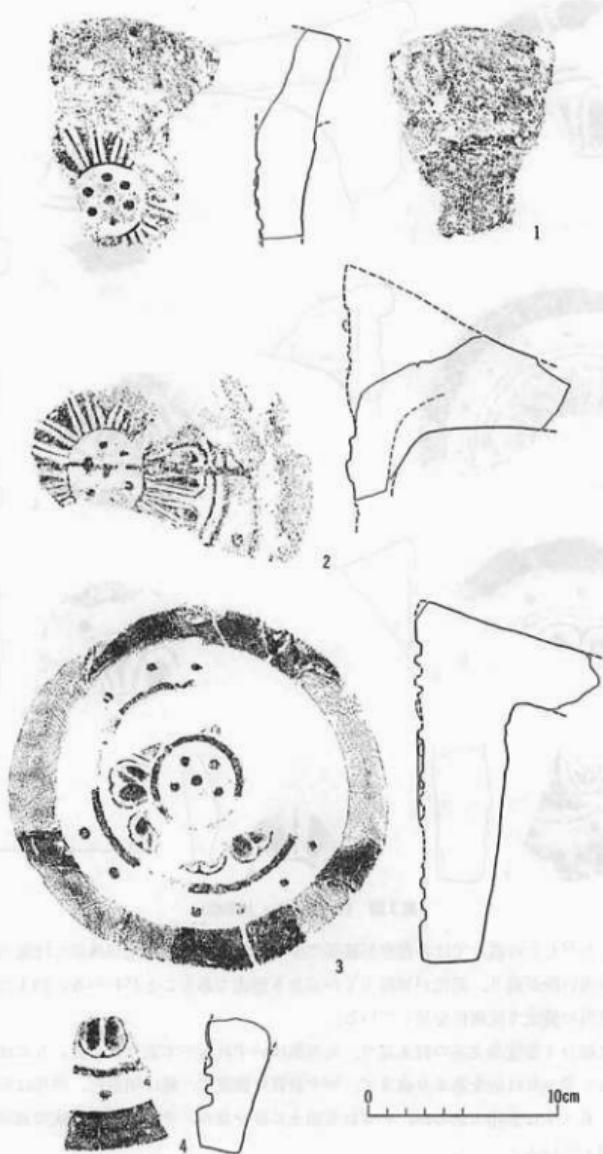


第7図 軒丸瓦拓影・実測図(1)

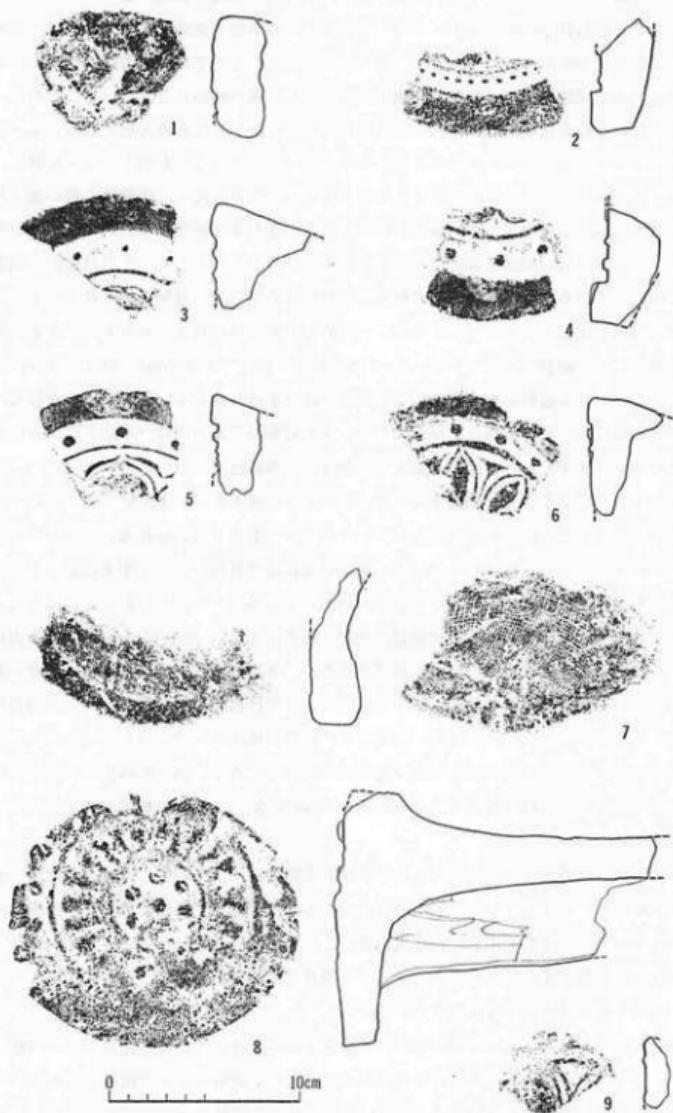
になろう。ただしこの破片では各花弁が細部で少し異なっている。瓦当外周には瓦当文の深さに対応した浅い段が廻り、瓦苞が周縁までかぶさる形式であることがわかる。胎土には砂を混え、やや軟質の焼成で灰褐色を呈している。

5～7は複弁4葉蓮華文系の軒丸瓦で、瓦当部はいずれも一本造りによる。5には綠釉が施されている。胎土共は砂をあまり含まず、やや軟質の焼成で、釉は明緑色、内部は灰白色を呈している。6・7は別窯であるが、いずれも胎土に砂を含み、やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰色を呈している。

8は小片ではあるが1・2の文様をまねたと見られる綠釉品である。花弁と弁間文の周間に



第8図 軒瓦拓影・実測図(2)



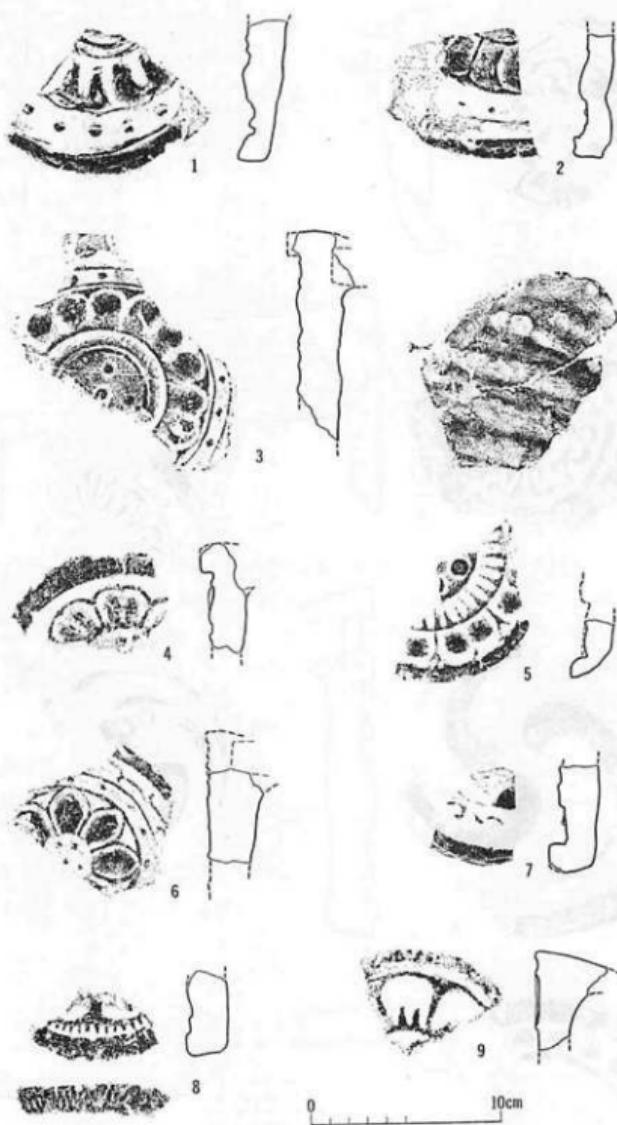
第9圖 軒瓦拓影・素測圖(3)

は細い輪郭線が残っており、中房は圓線で表されている。裏面の剥離の様子から見て一本造りによるものと思われる。第8図1・2は一本造りによる単弁8葉蓮華文の軒丸瓦で、これも前図1・2の文様をまねたものである。同様であるが、2の瓦当文には横方向の危傷が走っている。危傷のある同様例は豊楽院跡でも出土しているが、傷の幅が異なっていることから、2の瓦は削れたものを用い、割れ口は完全に固定されていなかったものと思われる。1・2とも綠釉品であるが、瓦当面にはほとんど釉がかかっていない。いずれも胎土には砂を混え、やや軟質の焼成である。3は一本造りによる複弁8葉蓮華文の軒丸瓦で、淡緑色の釉が施されている。胎土にはあまり砂を含まず、軟質の焼成である。4も3と同様品で、火を受けている。第9図1・2は幅の広い周縁と細かな珠文帯を残すだけの小片であるが、その特徴から朝堂院跡などで出土している単弁8葉蓮華文の軒丸瓦と見られるもので、綠釉が施されている。この軒丸瓦は瓦当部の成形を一本造りによらず、一般的な丸瓦との接合式によるものである。胎土には砂を混え、やや硬質の焼成である。3・4はそれぞれ別形であるが前図3・4とほぼ同じ文様の軒丸瓦で、これも綠釉が施されている。瓦当部は一本造りによる。胎土には砂を混え、いずれも軟質の焼成で、釉は淡緑色を呈している。5も綠釉品で瓦当部は一本造りによる。胎土にはあまり砂を含まず、かなり硬質の焼成で、釉は厚く淡緑色を呈している。

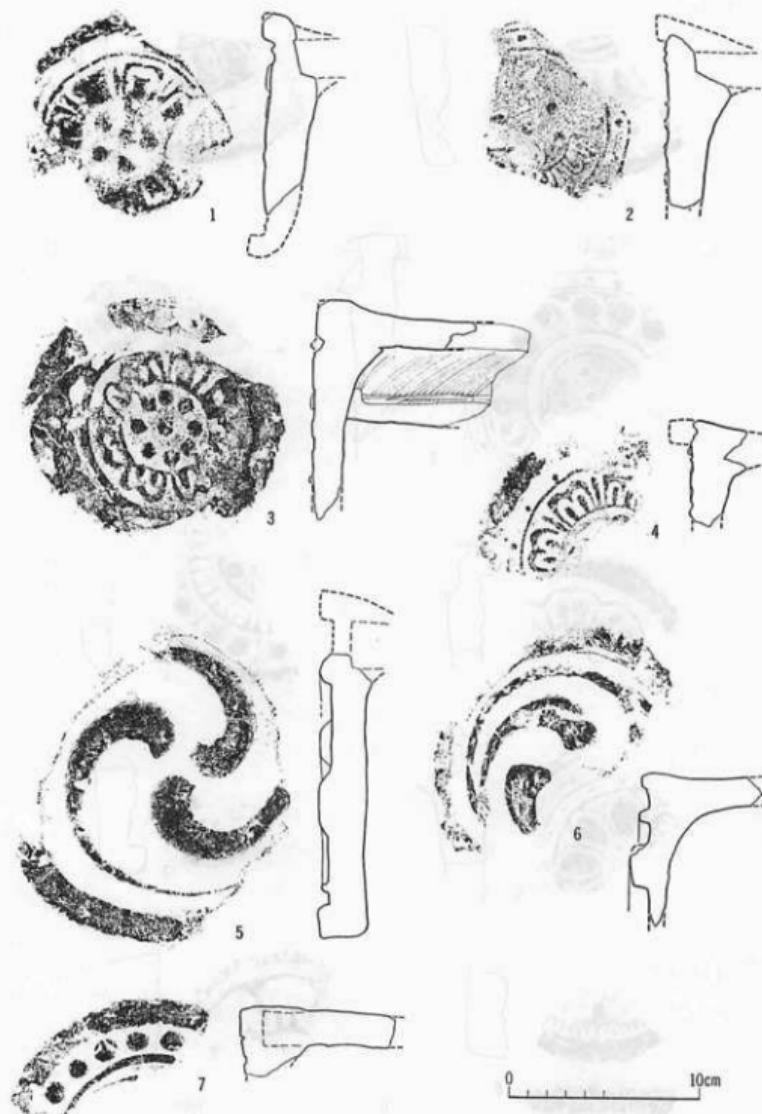
6は一本造りによる単弁8葉蓮華文の軒丸瓦である。胎土にはあまり砂を含まない。やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰褐色を呈している。7も一本造りによる軒丸瓦であるが瓦当面には周縁と珠文帯の一部を残すのみである。瓦当裏面には布目痕があり、中央部分が少し窪んでいる。この窪みがいかなる過程でつくものかわからないが、一本造りの軒丸瓦にはしばしば認められる。胎土には砂を混え、やや軟質の焼成で灰黒色を呈している。8は文様の表出が悪く、また瓦当面に離れ砂が多いため不鮮明であるが、8葉の複弁の間からさらに複弁が現く、森ヶ東瓦窯の製品と見られる。瓦当部から丸瓦にかけては粗く指ナデがなされ、瓦当の外周はヘラケズリ調整である。胎土には粗い砂を含み、硬質の焼成で灰色を呈している。9も小片ではあるが、中房に『下』銘を表す森ヶ東瓦窯産の軒丸瓦である。朝堂院跡出土の同様例には綠釉品も見かけるが、これは無釉である。胎土には砂を含み、軟質の焼成で灰黒色を呈している。

第10図1～3は丹波産の軒丸瓦である。いずれも調整はナデ基調とし、特に3は瓦当裏面を横方向に粗く指ナデされている。胎土にはほとんど砂粒を含まず緻密なもので、焼成は概して軟質である。1・3は表面黒色、内部灰白色、2は全体に灰色を呈している。4・5は播磨産と見られる複弁蓮華文の軒丸瓦である。ともに調整はナデを基調とし、胎土にはあまり砂を含まず、かなり硬質の焼成で青灰色を呈している。

6は珠文帯の外に唐草文帯を廻らす単弁8葉蓮華文の軒丸瓦である。瓦当部分の調整は主にヘラによっている。胎土には粗い砂を含むが多くはない。硬質の焼成で灰色を呈している。7も周囲に唐草文帯を廻らすものであるが主文はわからない。調整はナデによるもので、胎土にはほとんど砂を含んでいない。硬質の焼成で灰色を呈している。8・9はどちらも尊勝寺跡出土品に同様ないし同文例が多く認められる軒丸瓦である。8は花弁と周縁の間を放射線文でうめ



第10圖 軒瓦拓影・実測図(4)



第11図 軒瓦拓影・実測図(5)

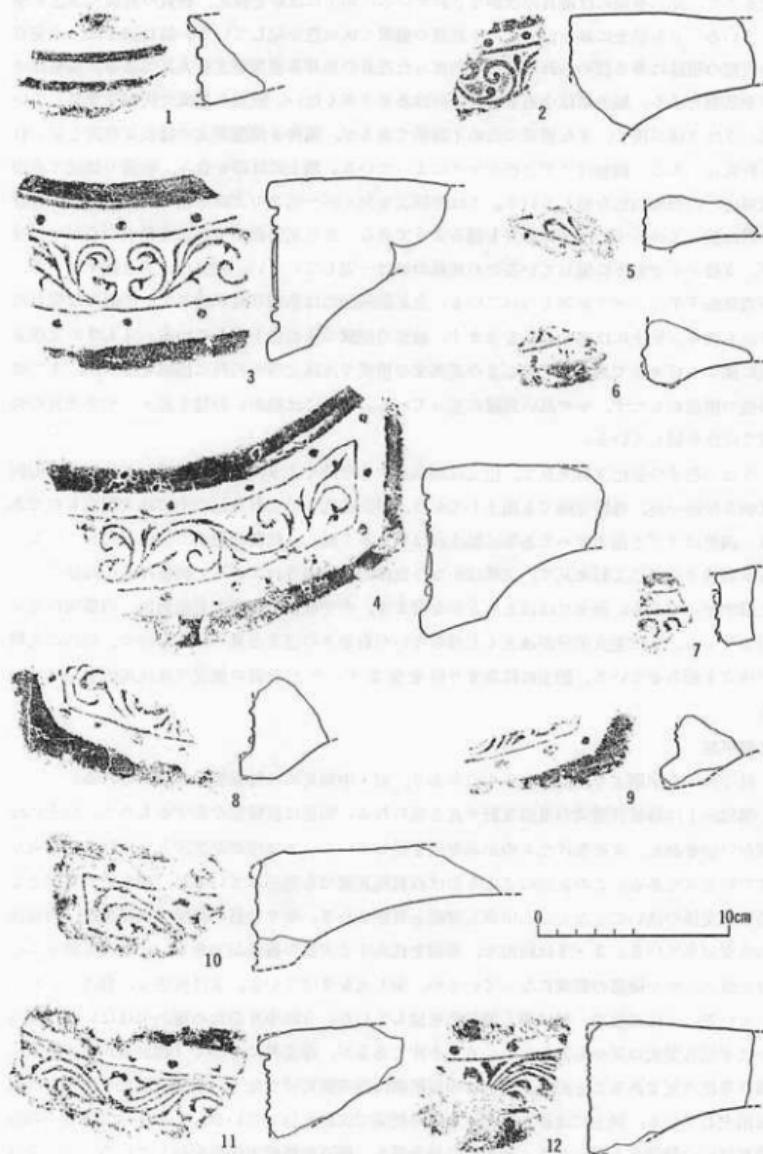
たもので、瓦当外周には縦目叩きがなされている。胎土には砂を混え、軟質の焼成で黒色を呈している。9も胎土に砂を混え、やや軟質の焼成で灰褐色を呈している。第11図1は、平安京の後期の遺跡に多く認められる、やや角ばった花弁の単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。調整はナデを基調とする。胎土には小石も含むが砂はあまり多くない。軟質の焼成で灰褐色を呈している。2は文様が浅く、また磨滅のため不鮮明であるが、複弁8葉蓮華文の幡枝瓦窯産と見られる軒丸瓦である。調整はナデと指オサエによっている。胎土には砂を含み、軟質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈している。3は弁間文を欠くが一応2の文様系統に含まれよう。花弁の形は整っておらず、一部に単弁も混るようである。また瓦当面の中心と文様の中心が一致せず、文様がやや右下に偏しているため周縁の幅は一定していない。調整はナデと指オサエで、瓦当裏面下半はケズリを加えられている。丸瓦部凹面には糸切り痕が顕著で、凸面には縦目叩き痕も残る。胎土にはあまり砂を含まず、軟質の焼成で灰褐色を呈している。4も2の文様系統に属する軒丸瓦である。ただし2の瓦当文の構成では珠文帯の内外に圓線をもつが、4では外側の圓線をもたず、やや高い周縁に至っている。胎土には細かい砂粒を混え、やや軟質の焼成で灰色を呈している。

5は右巻きの三巴文軒丸瓦で、巴文は頭部が中心を向くように表現されている。この同範例は朝堂院跡の他、尊勝寺跡でも出土しており、平安時代の巴文軒丸瓦の中では大型のものである。調整はナデと指オサエである。胎土には砂を多く混え、軟質の焼成で黒色を呈している。6も右巻きの三巴文軒丸瓦で、文様はかなり立体的に表出されている。調整は5と同様にナデと指オサエである。胎土にはほとんど砂を含まず、やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰白色を呈している。7は主文部分がほとんど残らないが右巻きの巴文と見られるもので、周囲に大粒の珠文を廻らせてている。胎土にはあまり砂を含まず、やや軟質の焼成で淡灰褐色を呈している。

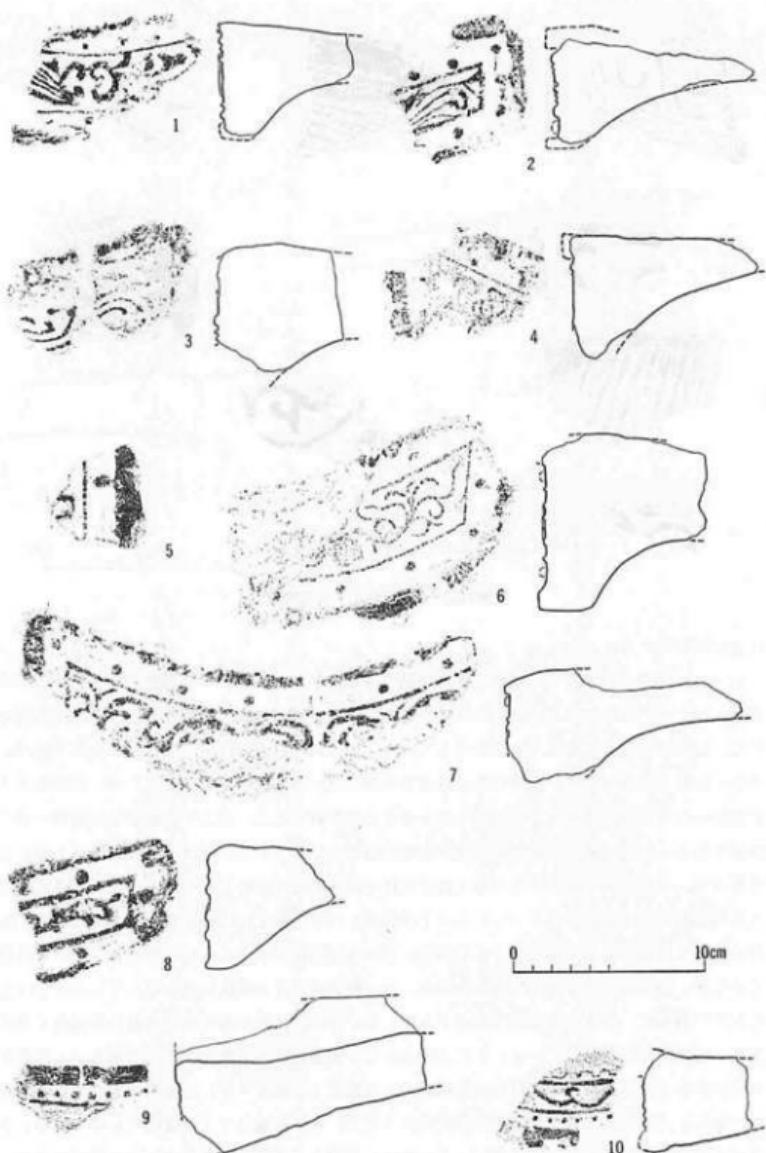
(2)軒平瓦

軒平瓦にも前期より後期に至るものがあり、前・中期瓦には綠釉製品が認められる。

第12図1は難波宮型式の重郭文軒平瓦と見られる。頭部は直線類を呈するもので、胎土には細かい砂を混え、火を受けたものか赤褐色を呈している。2は岸部瓦窯産と見られる均整唐草文の軒平瓦である。この瓦範によるものは西賀茂瓦窯でも造られているが、細かい砂を混える胎土や文様の浅いことなどから岸部瓦窯産と判断される。やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰褐色を呈している。3・4は同範で、前期を代表する大型の綠釉品である。いずれも胎土には砂を混え、やや硬質の焼成になっているが、少し火を受けている。3は灰色で、釉はややくすんでいる。4は褐色で、釉は厚く濃緑色を呈している。5は小片のため確かではないが、あるいは平城宮型式の瓦かも知れない。6も小片であるが、珠文帯に小さく『西』銘が認められ、西寺系統の瓦であることがわかる。この同範例は西寺跡だけでなく、平安宮跡などでもしばしば出土している。胎土には砂を混え、軟質の焼成で灰色を呈している。7も小片であるが西賀茂瓦窯産の軒平瓦と思われる。胎土には砂を混え、硬質の焼成で灰色を呈している。8・9は同範の軒平瓦の左右端部にあたる。胎土にはあまり砂を含まず、8は硬質、9は軟質の焼成で



第12図 軒平瓦拓影・実測図(1)



第13図 軒平瓦拓影・実測図(2)



第14図 軒平瓦拓影・実測図(3)

灰色を呈している。

10・11は同様の軒平瓦で、蟠枝瓦窯の製品である。平瓦部凸面はヘラ調整がなされ、凹面の布目はやや粗いものである。胎土には砂を混え、10は軟質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈し、11はやや硬質の焼成で灰色を呈している。12は10・11とほぼ同じ文様構成の軒平瓦で、布目や調整も同様である。やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰白色を呈している。第13図1は前図10～12の文様系統に属すると見られるやや小型の軒平瓦で、胎土や調整等も前図10～12と同様である。軟質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈している。2は中心部に『修』銘を表すもので、その左右に展開する唐草文は前図10～12の系統に近いものである。なおこの瓦当文では両脇の珠文が縦線で連なっていることが特徴となる。胎土には砂を含むが多くはない。軟質の焼成で灰色を呈している。3も前図10～12の文様系統に属するものと思われ、造りも同様であるが、他に同範例を確認できなかった。やや軟質の焼成で淡灰褐色を呈している。4は小野瓦窯の製品で、唐草文は複線で表現されている。胎土には砂を多く混え、軟質の焼成で表面黒色、内部灰白色を呈している。5は瓦当面のごく表面だけが剥離した小片であるが、珠文と周縁にかかる筋傷から、中期段階の緑釉瓦で、前期瓦（前図3・4）をまねたものであることがわかる。火を受けており、釉が焼けただれている。6も緑釉品で火を受けたものである。大きさや造りなどは前図3・4に近い。7の文様も前図3・4の系統に属するかと思われるが、無釉であり、他に同範例は見いだせなかった。胎土は砂を含むもので、焼成は軟質、灰褐色を

呈している。8は中心部に小さく『上』鉢を表す均整唐草文の軒平瓦である。頸部から平瓦部にかけては粗くヘラ調整され、凹面の布目はかなり粗い。胎土にはあまり砂を含まず、軟質の焼成で灰褐色を呈している。9・10は同範例である。文様は左右から中央に向う唐草文で、周間に細かな珠文帯を廻らせたものである。いずれも調整は指オサエとケズリによっている。胎土には砂を混え、硬質の焼成で青灰色を呈している。

第14図1は丹波産の軒平瓦である。瓦当部はかなり薄くつくられ、頸部には斜方向の粗い繩目印きがなされている。胎土にはほとんど砂を含まず、やや軟質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈している。2・3は播磨系の軒平瓦である。すなわち瓦当部を平瓦と接合して形成するもので、文様は同範例を確認できなかったが、中央に半截宝相華文をおき、左右に太い茎の唐草文を展開させるものと思われる。いずれもやや硬質の焼成で灰色を呈している。なお3の平瓦部凸面には平行条線文の印きがなされている。4は左から右に向う扁行唐草文の軒平瓦である。同文例は尊勝寺跡などに多く出土するが、同範例は確認できなかった。平瓦部凸面の調整はナデを基調とする。胎土にはあまり砂を含まず、やや軟質の焼成で灰褐色を呈している。5も左から右に向う扁行唐草文の軒平瓦で、幡枝瓦窯産と見られる。平瓦部凸面の調整は指オサエとナデによる。胎土には砂を含むが多くはない。やや軟質の焼成で灰色を呈している。

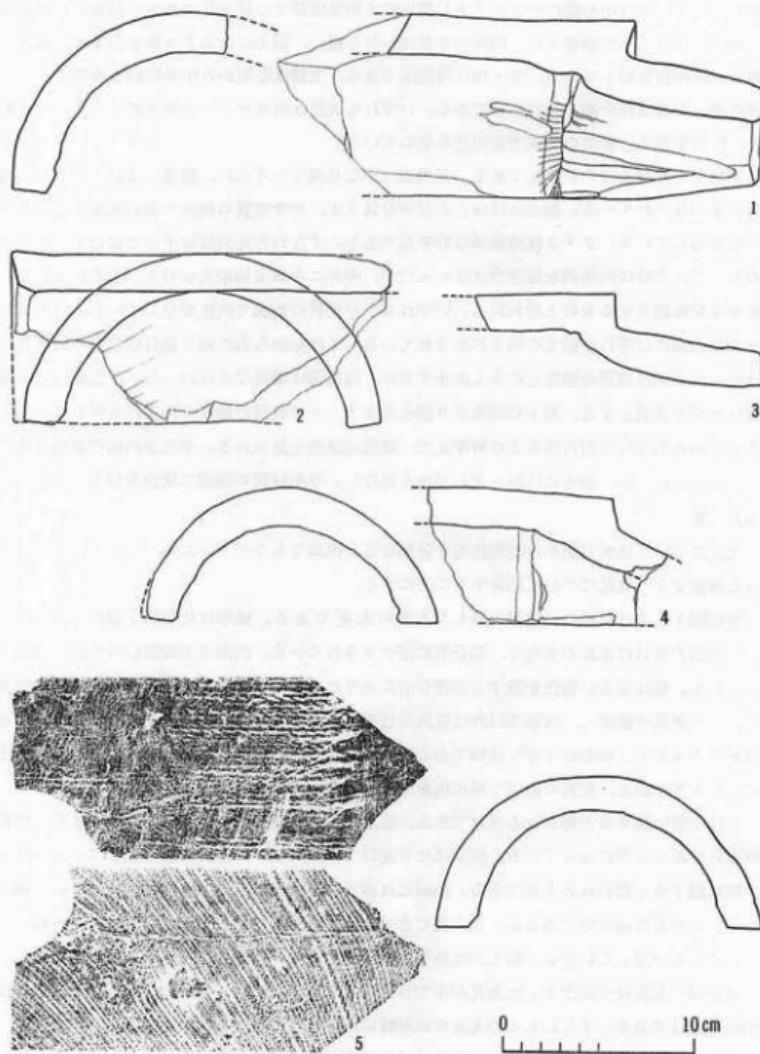
(3) 丸 瓦

丸瓦についてはまだ細かな時期比定や分類なども困難なものが多いため、ここでは主に目立った特徴をもつ丸瓦について紹介することにする。

第15図1・2は前期の、緑釉を施した大型の丸瓦である。成形は比較的丁寧になされている。凹面の布目は乱れが少なく、部分的に指ナデされている。凸面は玉緑部以外全面に施釉されている。釉は明るい緑色を呈するが部分的にムラになっている。1・2とも胎土には砂を混え、やや硬質の焼成で、施釉部以外は淡灰褐色を呈している。3は前期の、西賀茂瓦窯産かと思われる丸瓦で、成形は丁寧な部類である。凸面にはかすかに繩目印き痕が認められる。胎土には砂を多く混え、軟質の焼成で黒灰色を呈している。

4は中期に属すると思われる丸瓦である。成形などは前期瓦とはほとんど同様であるが、凹面の布目が粗いものになっている。焼成はやや硬質で表面灰色、内部灰白色を呈している。5も中期に属すると思われる丸瓦である。凸面には繩目印き痕をとどめ、凹面には糸切り痕が顕著に残る。布目は部分的であるが、布の継ぎ合せの圧痕が明瞭である。全体の造りはやや雰雰で、瓦の厚さも一定していない。胎土には砂を含み、やや硬質の焼成で灰色を呈している。

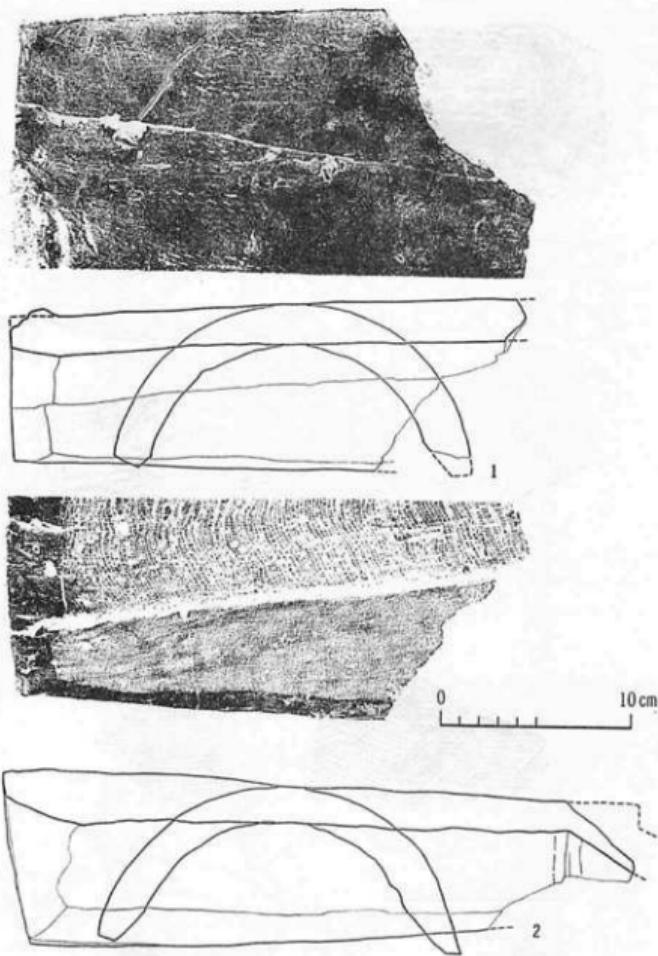
第16図の丸瓦は今回出土した丸瓦の中で目立つものであった。この類の最も特徴となるのは凹面の布目である。すなわちこの丸瓦の成形時に用いられた布は2種類の布を組みだしたもので、粗い布目は1㎠に6×7本、細かい布目は11×13本の織糸が数えられる。このような布が用いられたのは、この丸瓦の径が19cm前後とかなり大型の丸瓦であることから、通常の丸瓦用の布に別布を縫足してこれに合せたものかとも思われる。凸面は繩目印きを施した後、これをナデ消しているが部分的に繩目の残る例もある。胎土にはあまり砂を含まない。焼成は軟質のものが多いが、きわめて硬質のものもあり、色調は灰～灰黒色を呈している。1はやや硬質、2は



第15図 九瓦拓影・実測図(1)

かなり硬質の焼成で、2の凹面は一部銀色を呈している。

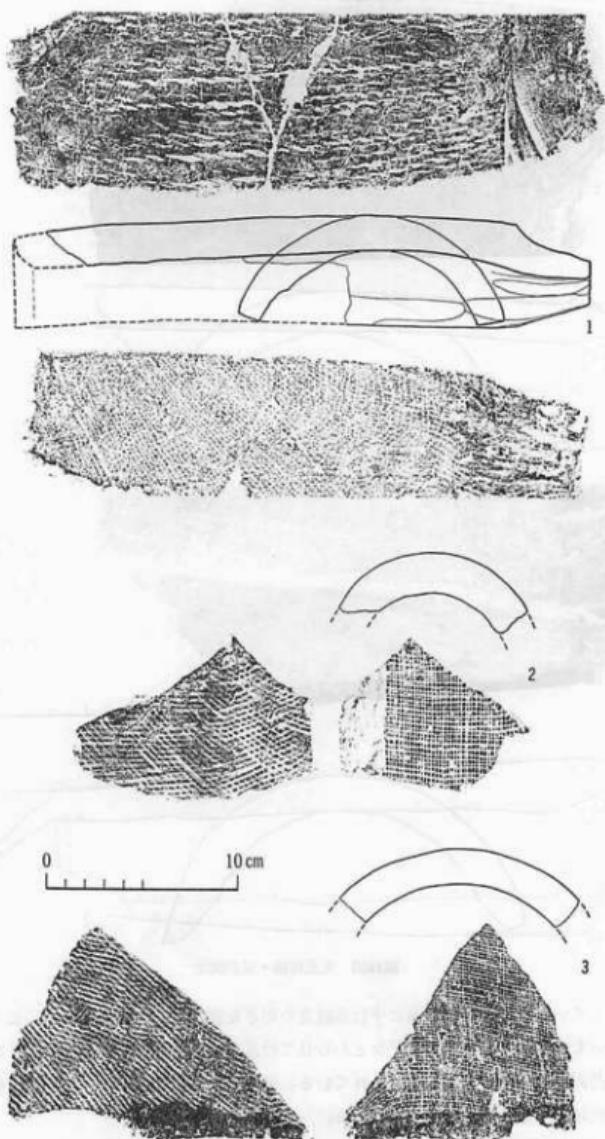
第17図1はやや小型の九瓦で、少し偏平な感じを受ける。凸面は織目を残し、凹面の布目は比較的粗いもので糸切痕も認められる。胎土には砂を含み、軟質の焼成で、一部灰黒色、他は



第16図 丸瓦拓影・実測図(2)

灰色を呈している。2・3は凸面に平行条線文の印きを細かく施した丸瓦で、円弧の小さいものと大きいものがあり、印きの様子などから見て行基葺式の丸瓦かと思われる。3は端部の破片で、凹凸両面ともヘラケズリがなされている。胎土にはほとんど砂を含まず、硬質の焼成で、2は灰褐色、3は青灰色を呈している。

この他には中期に属する綠釉丸瓦も出土している。いずれも小片で全体はわからないが、前期瓦に比べ凹面の布目がかなり粗く、凸面には繩目を残すものが多い。釉は概して厚く、釉色



第117図 九瓦拓影・実測図(3)



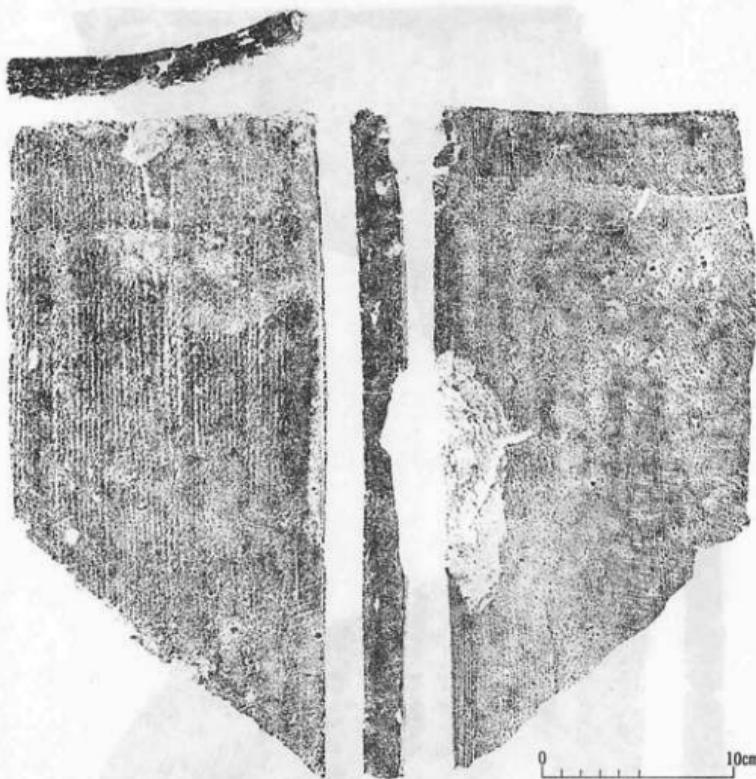
第18図 平瓦 拓影(1)

は濃淡さまざまである。なお火を受けたものも多く認められる。

(4) 平 瓦

平瓦も丸瓦同様、主に特徴のあるものについて紹介する。

第18・19図の平瓦は今回出土の平瓦の中で最も大型のもので、量的にも目立つ。全体のわか

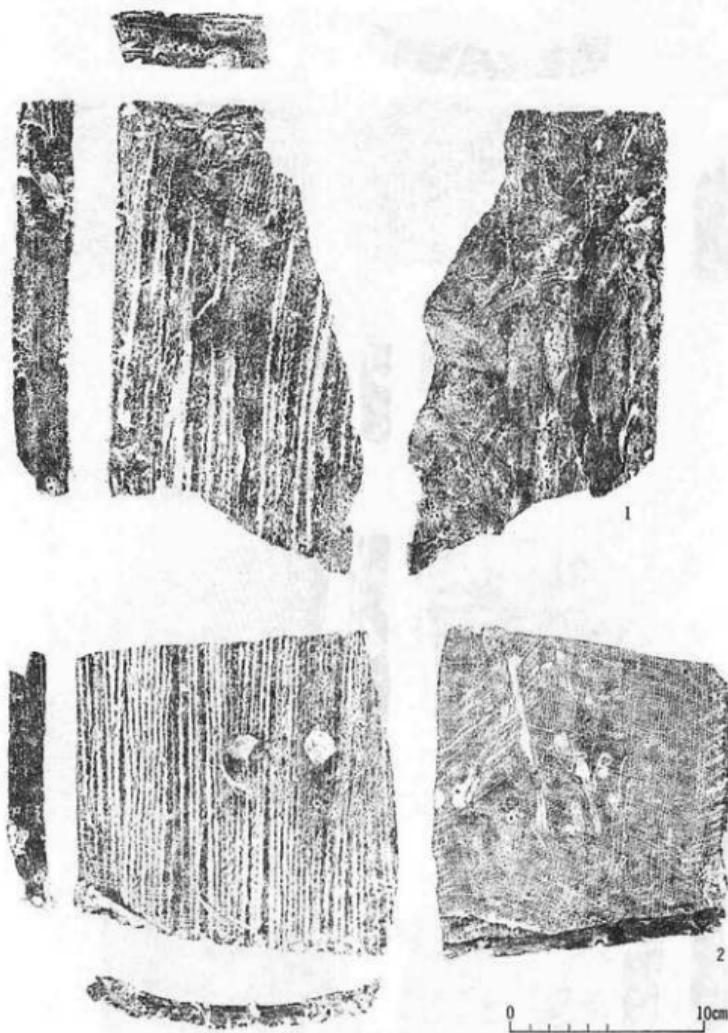


第19図 平瓦 拓影 (2)

る個体はなかったが、おそらく幅30cm、長さ45cm程度のものと思われる。厚さは約2cmである。造りも丁寧で、凹面の布目、凸面の繩目ともかなり細かいものである。胎土には砂を混え、焼成は概して硬質で灰色を呈するものが多い。第18図の例は火を受けたものか赤褐色を呈している。

第20図1はやや厚手の平瓦である。凸面の繩目叩きの深さは一定していない。凹面はナデにより布目が消されている。胎土には砂を混え、やや軟質の焼成で表面灰色、内部灰白色を呈している。2は凸面の撻目叩きが明瞭に残る例で、凹面の布目は瓦の軸に対し、少し斜めになっている。また凹凸両面とも同じ位置に指頭圧痕が認められる。胎土にはあまり砂を含まず、やや硬質の焼成で灰白色を呈している。

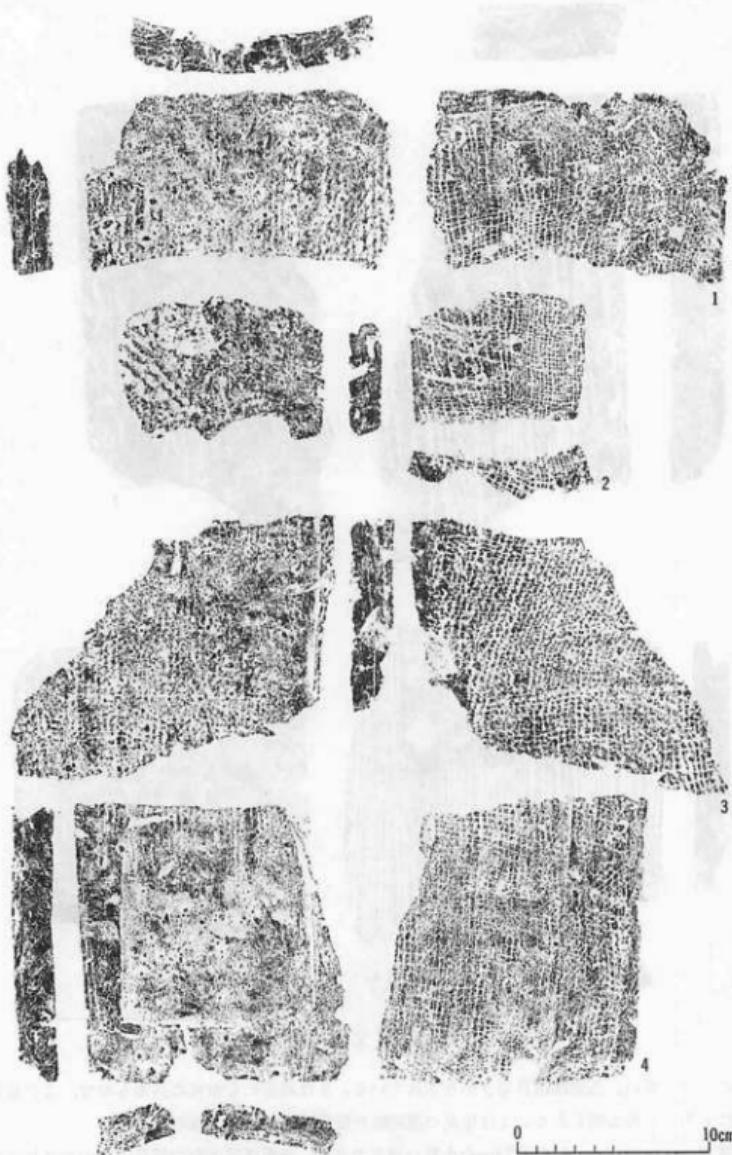
第21図は凹面の粗い布目から見て、中期に属すると思われる平瓦である。例示した平瓦はいずれも胎土は砂を混えるもので、灰～灰黒色を呈し、硬質の焼成であるが、この類には軟質焼



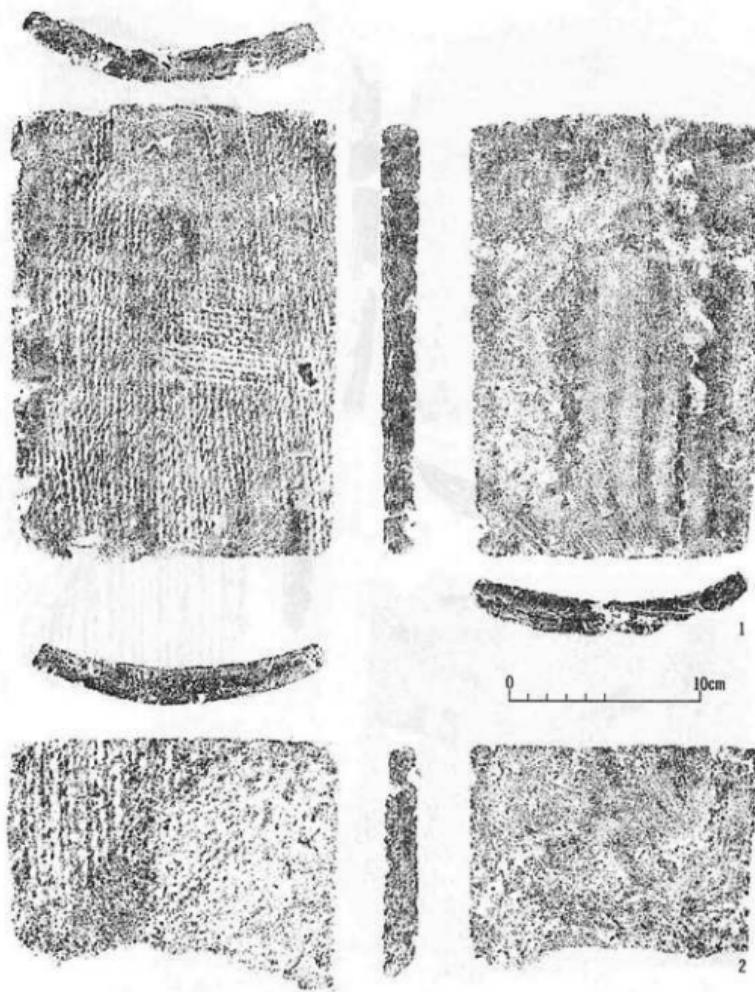
第20図 平瓦 拓影 (3)

成のものも多い。凸面は繩目叩きがなされている。2は端面にも布目のあるもので、この他側面にも布目が残る例もある。4は生瓦の運搬時か乾燥時の重ね痕が残る。

第22図は幅約15cm、長さ約23cmの小型の平瓦である。凸面は縦方向の繩目叩きがなされてい、るが部分的に横または斜めの叩きもなされている。凹面は糸切痕と布目がかすかに残る。胎土



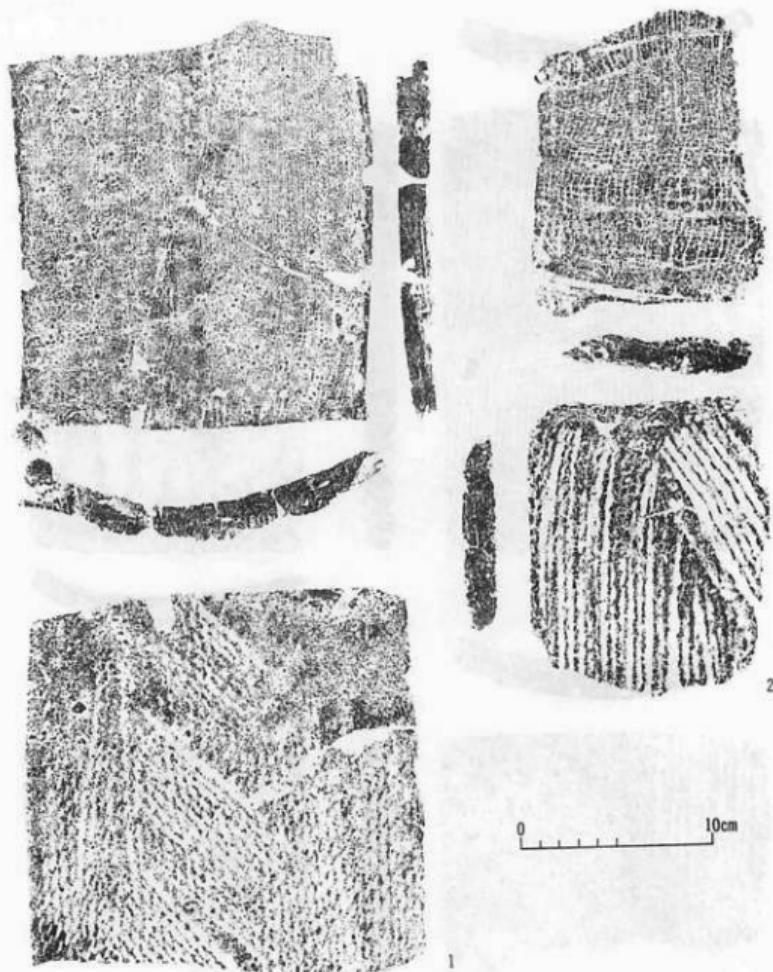
第21図 平瓦 拓影 (4)



第22図 平瓦 拓影(6)

は砂を多く混えるもので、1・2とも火を受け、赤褐色を呈し、凹凸両面に焼土がこびり付いている。この瓦は小型ではあるが、厚さ約2cmのやや厚いもので、また両面に焼土が付くことからも通常の平瓦かどうか疑問も残る。

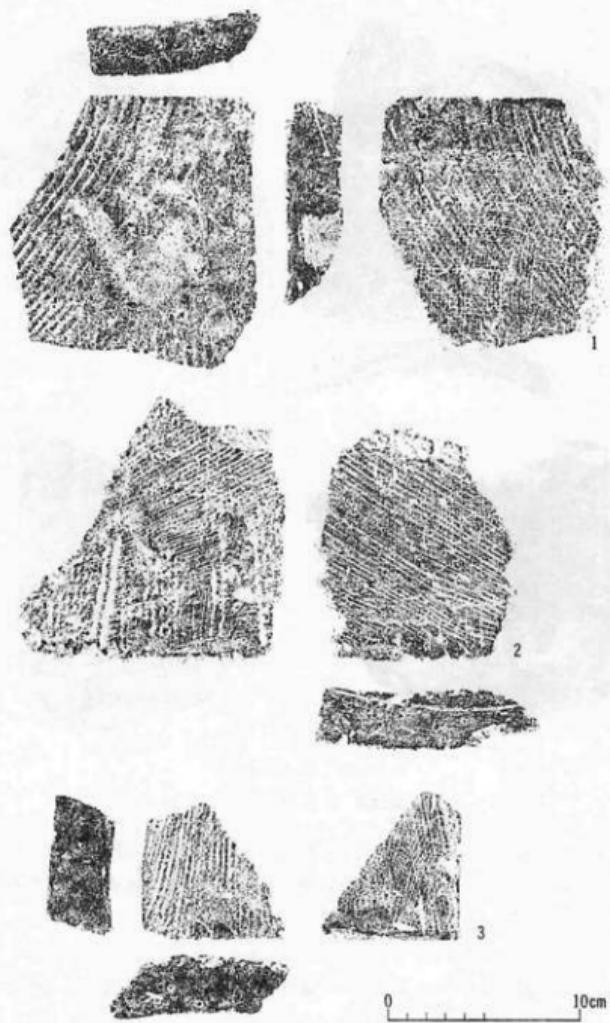
第23図1もやや小型の平瓦である。前図の例と同じように凸面は縦方向の繩目叩きと斜方向の叩きがなされている。胎土には粗い砂を含み、きわめて硬質の焼成で暗青灰色を呈し、一部



第23図 平瓦 拓影 (6)

自然釉もかかっている。2も凸面に一部斜方向の繩目叩きがなされている。全体の大きさのわかる例はなかったが、斜方向の繩目叩きは凸面の中央部になされるようで、この平瓦の幅は26cm程度のものと思われる。胎土には砂を含み、軟質の焼成で灰白色を呈している。

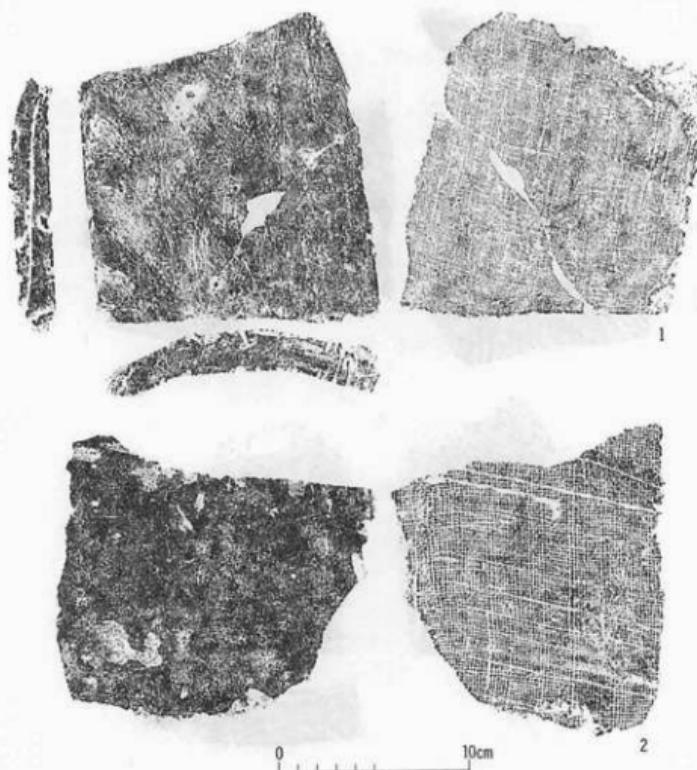
第24図は厚さ3cm前後のかなり厚手の平瓦である。凹凸両面に糸切り痕が顯著で、繩目・布目もかすかに認められる。いずれも胎土には砂を含み、やや軟質の焼成で黒～灰白色を呈して



第24図 平瓦 拓影(7)

いる。

第25図は凸面をナデ調整された平瓦で、叩き目などは認められない。凹面の布目は乱れが少ない。1は胎土にあまり砂を含まず、硬質の焼成で灰色を呈し、2は胎土に細かい砂を混え、やや軟質の焼成で灰色を呈している。



第25図 平瓦 拓影 (8)

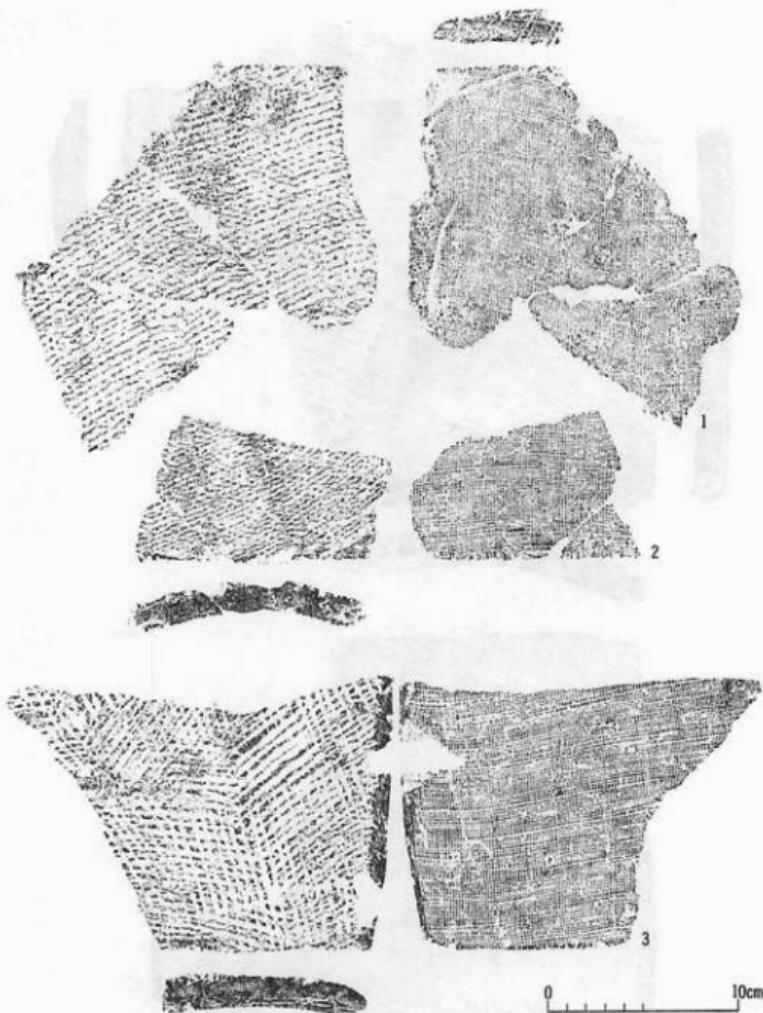
第26図の平瓦は、凸面の繩目印きが斜方向になされたもので、この印きの原体は、板に繩を横方向に巻きつけたものであろう。胎土には砂を多く混え、軟質の焼成で黄灰色を呈している。

第27図1・2も前図と同様の印きがなされた平瓦である。ただし凹面の布目はあまり乱れていない。胎土は砂を混えたもので、焼成はやや硬質、灰白色を呈している。3は凸面に不定方向の繩目印きを施した平瓦である。経目は1・2や前図の例に近いように感じられるが、凸面の側端をヘラケズリするなど細部の調整は異なっている。胎土にはあまり砂を含まず、やや軟質の焼成で暗灰褐色を呈している。

第28図は凸面に扇形が交差するような繩目印きを施した平瓦で、その造瓦技法から讃岐産のものと見られる。凹面の布目は概して細かいもので、布目は端面・側面までまわる例も認められる。胎土には砂を多く混えている。1はかなり硬質の焼成で暗青灰色を呈し、部分的に自然



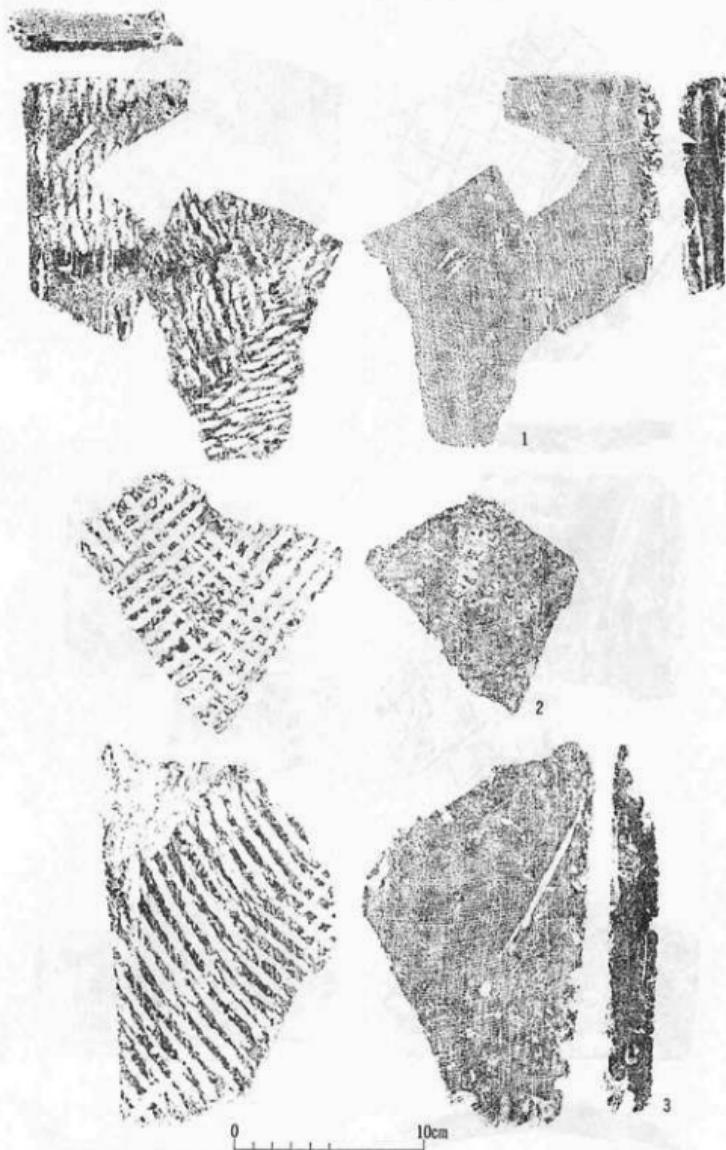
第26図 平瓦 拓影 (9)



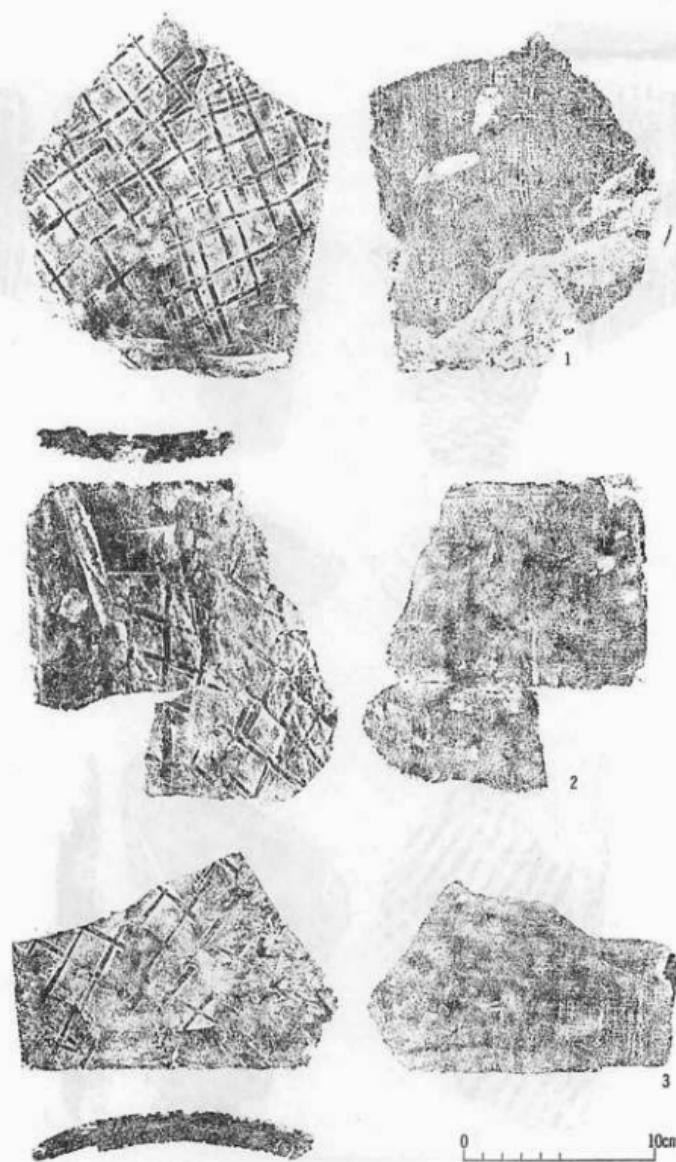
第27図 平瓦 拓影 00

釉がかかっている。2・3はやや軟質の焼成で灰色を呈している。

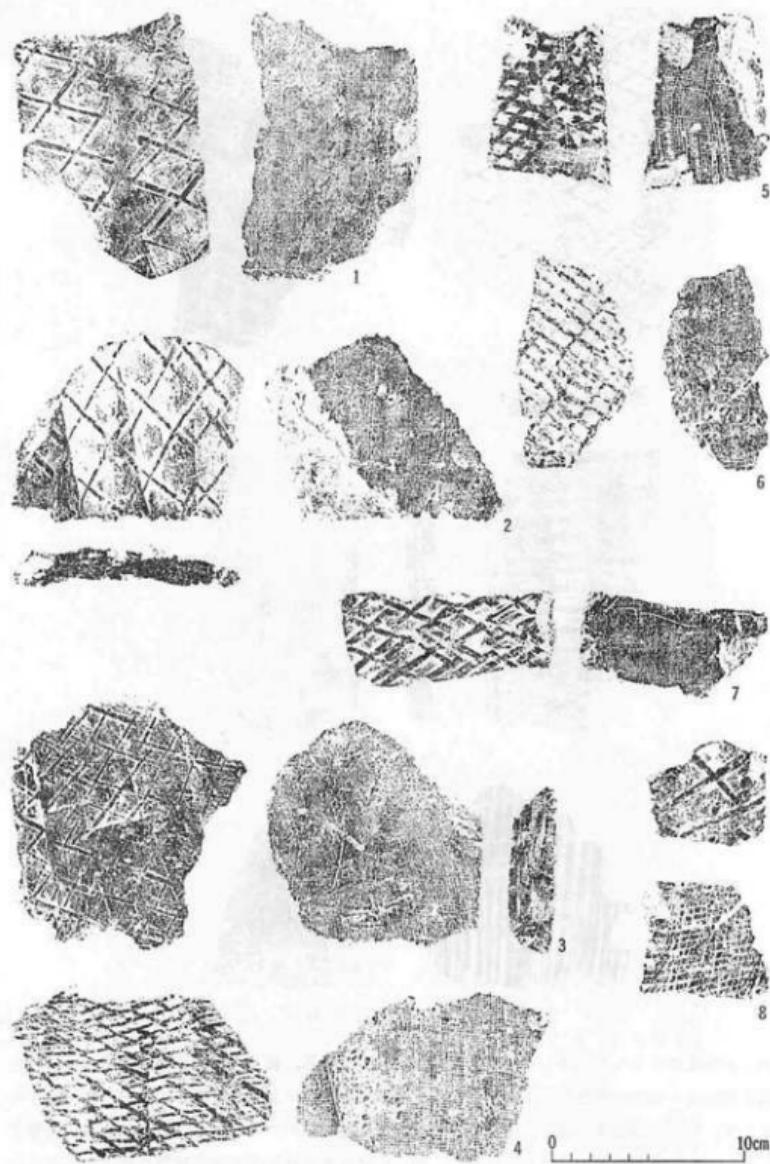
第29・30図は凸面に斜格子文の印きを施した平瓦である。印きの原体には多種類あるが、第29図の例と第30図1～5・7は胎土や焼成が類似しており、印きもやや斜めになされることなど、大部分は同一造瓦所の産かと思われ、出土量も多い。瓦の厚さは中央部が2cm強、側端部



第28圖 平瓦拓影 11



第29図 平瓦拓影

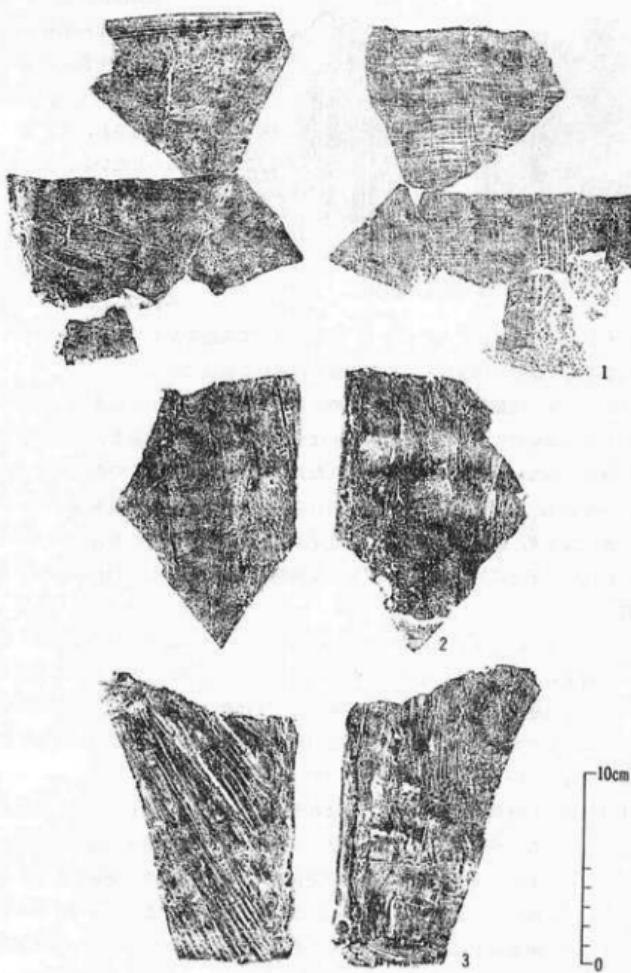


第30図 平瓦拓影跡



第31図 平瓦 拓影

が1cm程度になるものが多い。いざれも胎土には砂を含み、概してやや軟質の焼成である。色調は灰白色・褐色・黒色などさまざまな色を呈している。第30図6は厚さ約1cmのやや薄手の平瓦で、胎土に砂を多く混え、やや硬質の焼成で灰色を呈している。8は厚さ約2.5cmの厚手の平瓦である。凹面の布目はかなり粗い。胎土にはあまり砂を含まず、軟質の焼成で黒褐色を呈している。



第32図 平瓦 拓影

第31図1も凸面に斜格子文の叩きを施した平瓦である。凹面の布目は不明瞭になっている。胎土には砂を含み、やや硬質の焼成で灰白色を呈している。2は横方向の平行条線文の叩きを施した平瓦である。胎土には砂を多く含み、軟質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈している。3は縦方向の平行条線文の叩きを施した平瓦で、厚さ約2.5cmのやや厚手の瓦である。胎土には細かい砂を多く混え、やや軟質の焼成で表面灰色、内部灰白色を呈している。



第33図 平瓦拓影跡【縮尺1/2】

第32図は播磨産かと思われる。厚さ1cm前後の平瓦である。端部や側面の調整は指ナデによる。1の凸面は全面ナデ調整され、叩き目などは認められない。凹面の布目は細かい。2は凹凸両面ともナデ調整がなされている。3は凸面に平行条線文の叩き目が残る例で、凹面はナデ調整である。

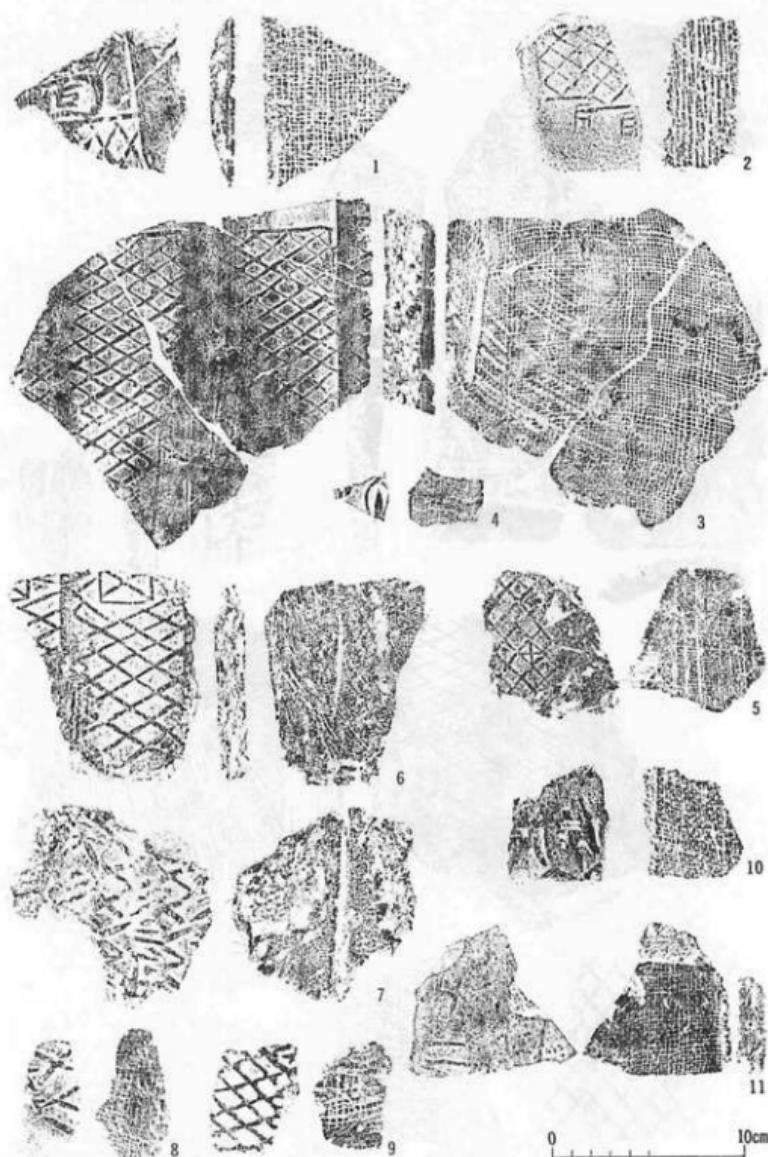
る。いずれも胎土には砂をほとんど含まず、硬質の焼成で灰色を呈している。このような播磨系と思われる平瓦は量的には少なく、十数片余が得られる程度である。

平瓦には以上のお他、前期から中期にかけてのものと見られる平瓦が多數あり、実際にはこれらが大部分をしめるものであったが、特徴が少なく、細分類は困難である。なお第33図は凹面の布目が綾織になっている平瓦で、今回得られた瓦類の中ではこの1片のみであった。凸面には網目叩きがなされ、離れ砂と見られる砂粒が目立つ。凹面には糸切り痕も残っている。胎土にはあまり砂を含まず、硬質の焼成で灰白色を呈している。綾織などの布目をもつ例は11世紀末から12世紀代の軒平瓦に散見され、この平瓦も後期に属するものと思われる。

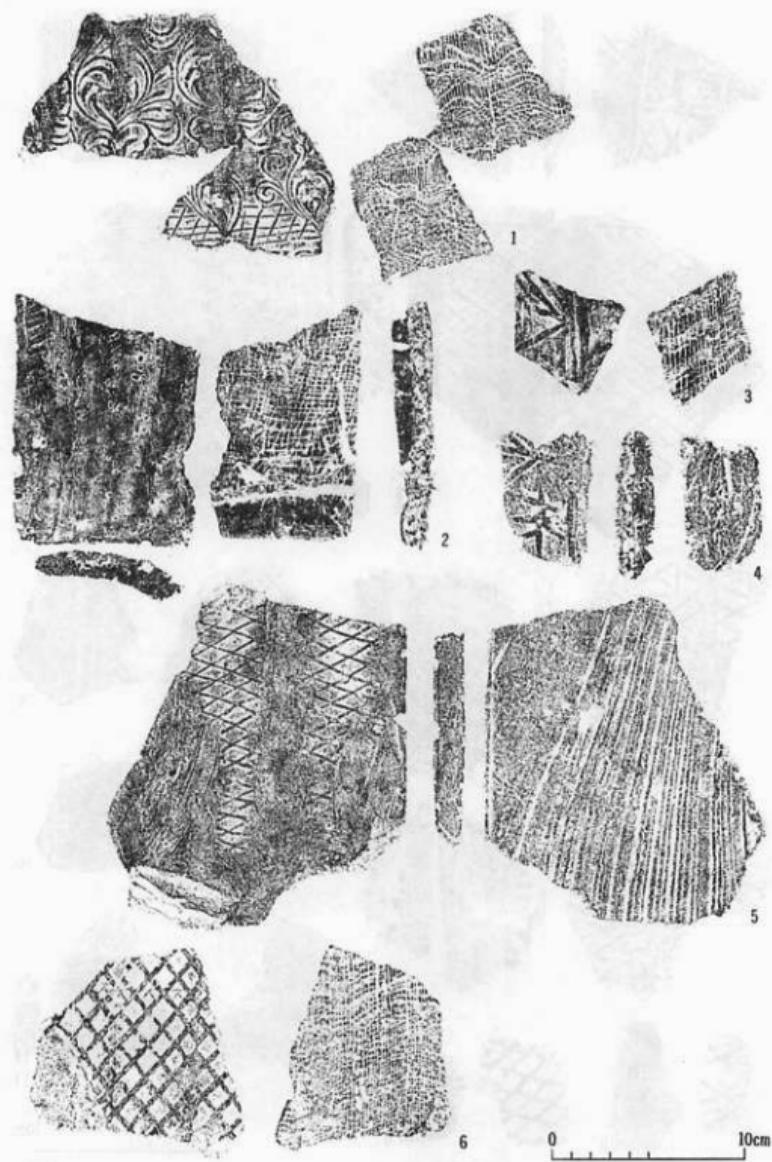
(5)九州系瓦

九州系瓦としたものには丸瓦と平瓦があり、後述のように九州地方で同じ原体による叩きを施したものが出土しており、造瓦技法から見て九州地方で製造されたと見られる瓦類である。ただし、すべて九州地方出土例と対比できるものだけではなく、造瓦技法、すなわち平瓦が桶巻4枚造りによるもので、胎土に長石粒の目立つ粗い砂を含むことなどから類推して九州系と判断したものも含んでいる。

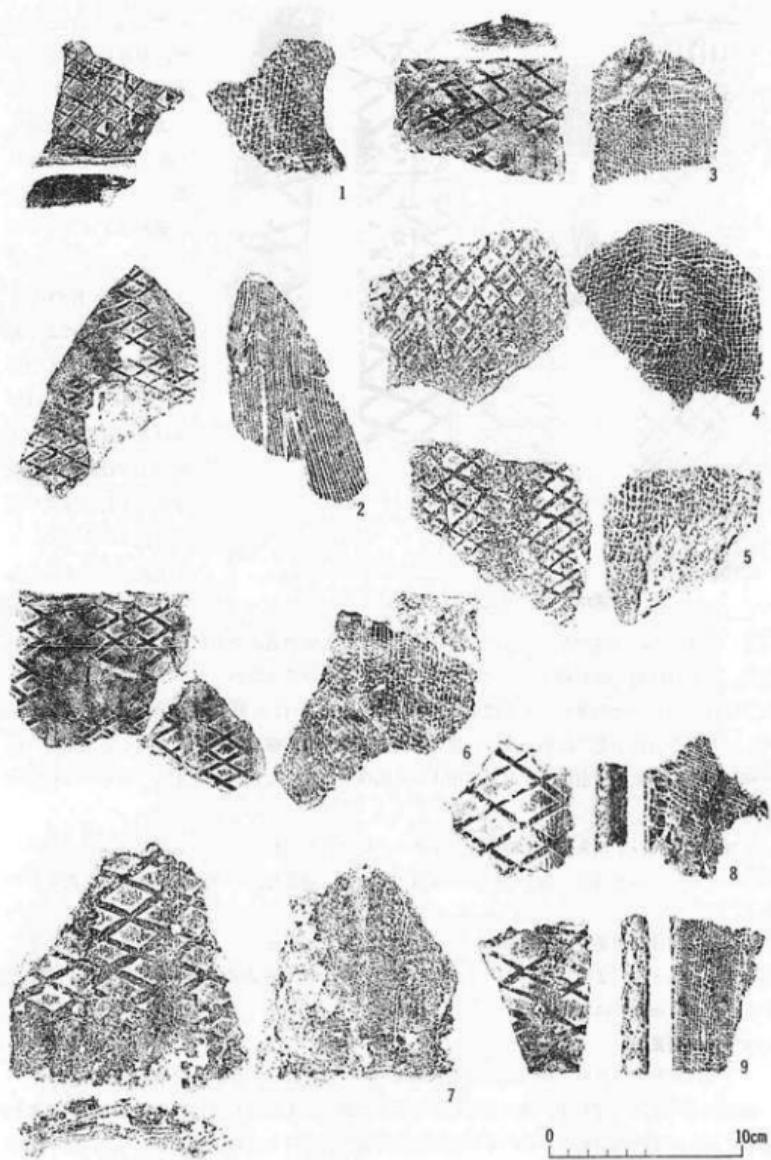
第34図1は『菅園』銘の平瓦である。これは九州地方でも多く出土しており、福岡市西区の斜ヶ浦瓦窯であることが知られている¹⁾。2・3は『門司』銘の叩きを施されたもので、2が丸瓦、3は平瓦である。同一叩き文の例は平安宮跡では内裏跡に多く発見されている。4・5の叩き目は同一原体によるもので、4は丸瓦、5は平瓦である。この原体によるものは前原平三郎氏により、福岡県飯手郡飯手町の、浦の原池瓦窯で採集されている²⁾。6は平瓦で、この叩き原体によるものは平安宮跡では朝堂院跡出土瓦の中によく見受けるものである。今回の調査でも丸瓦・平瓦合せて12点出土している。7・8の叩き目は、斜格子文の中に『天延三年』銘を裏字で入れるもので、7は丸瓦、8は平瓦である。同一原体による例は筑前国分寺でも出土しており³⁾、それによると銘は『天延三年七月七日』となる。この銘が何を表すのかはわからないが、天延三年(975)という記年銘は九州系瓦が平安京にもたらされた年代の一時点を示すものとして興味深い資料である。9は平瓦で叩き目は斜格子文の一部に文字または記号を加えたものであるが、類例はわからない。10は丸瓦で、叩き目は不鮮明ながら裏字の



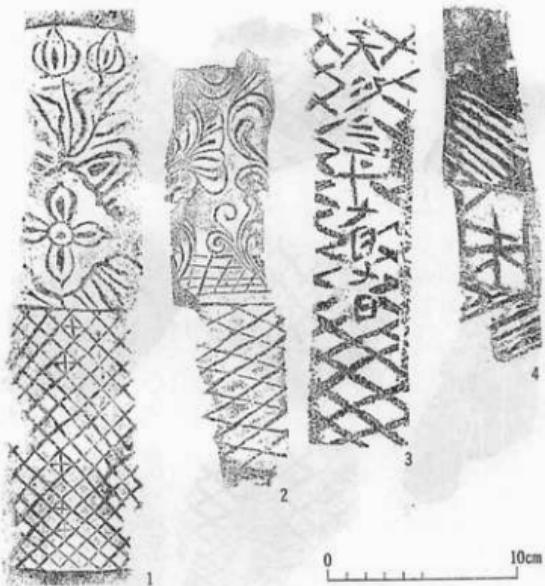
第34図 九州系瓦拓影(1)



第35図 九州系瓦拓影(2)



第36図 九州系瓦拓影(3)



第37図 九州系瓦印き目復原図

『未』とするのには疑問もある。この原体による例は大宰府遺跡でも出土している⁵⁾。5は平瓦で、印き目は細かな斜格子文だけになっている。確認はできなかったが、浦の原瓦窯ではこれと同様の斜格子文印きの平瓦も採集されており、あるいは同原体かと思われる。6は丸瓦で、印き目の斜格子文には格子目の一帯に『大』のような文様が加えられている。九州での出土例では福岡県太宰府市の米木北瓦窯出土品に同様の印きがなされており⁶⁾、あるいは同原体かも知れない。

第36図は3・6・7が丸瓦で、他は平瓦である。いずれも斜格子文の印きがなされたもので、特徴が少ないとみ九州出土例との同定が困難であるが、造瓦技法より九州産と推定したものである。

なお第37図は九州系瓦の印き目の内、4種類の原体を拓影などにより復原したものである。1は第34図4・5、2は第35図1、3は第34図7・8、4は第35図2～4に対応する。印き板の幅は7～9cm程度になろう。

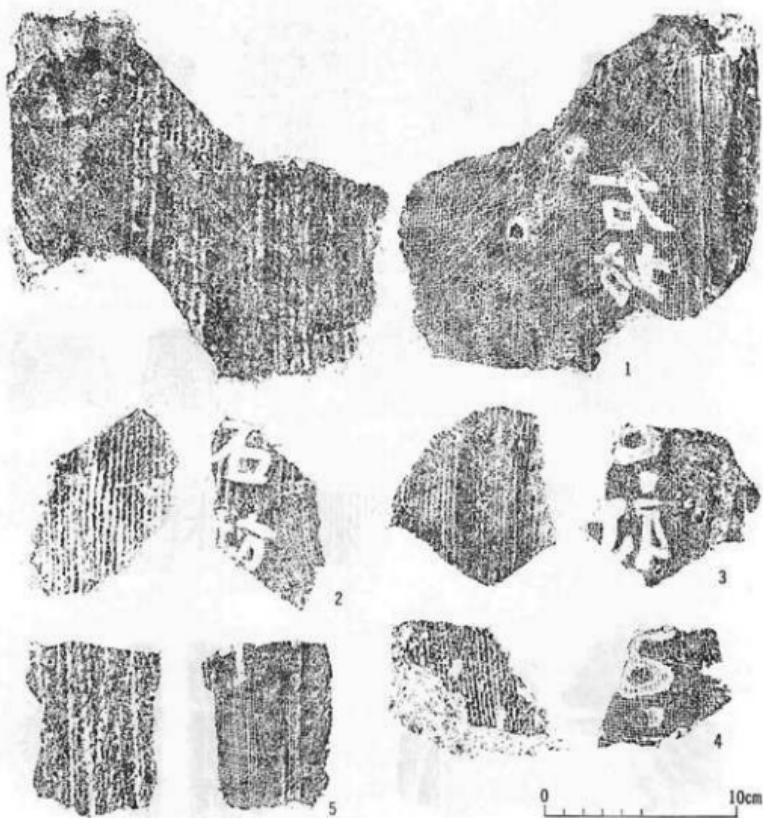
(6) 文字・記号瓦

ここでは九州系以外の瓦類に表された、刻印・ヘラ描きによる文字・記号瓦を紹介する。

第38図はいざれも『右坊』銘の刻印のある平瓦である。木理痕も認められるため、印は木製と見られる。1は裏字になっているが他は正字である。3・4は同印によるもので、他の同印例⁷⁾によると銘は『右坊小』となる。5はこのままで字にならないが、同印例⁸⁾によって

『佐』銘と見られるものである。11は平瓦で、印き目は文字らしく、一部は裏字の人偏のように見えるためこれも『佐』銘かも知れない。

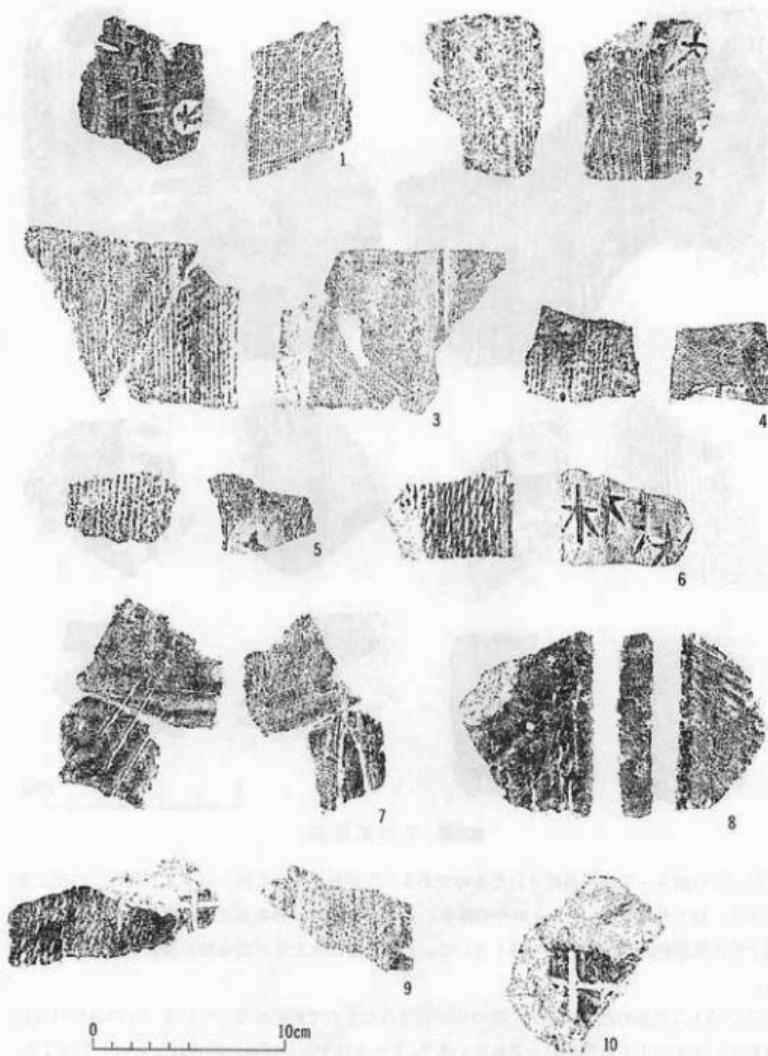
第35図1は下半を斜格子文、上半を唐草文とした印き目の丸瓦で、この原体による瓦は周防国府跡でも出土している⁹⁾。2～4は、中ほどに『未』字を入れ、上下は傾き方向を違える平行斜線文の印きを施したもので、2が丸瓦、3・4は平瓦である。ただ文字を



第38図 文字瓦拓影

『坊』字の第6・7画が省略されたものであることがわかる。これらの平瓦自体は、凸面に縦目叩きを施した厚さ2~2.5cmのやや厚手の瓦で、胎土には砂を混え、いずれもやや軟質の焼成で表面灰黒色、内部灰白色を呈している。ただし2は火を受けたものか淡赤褐色を呈している。

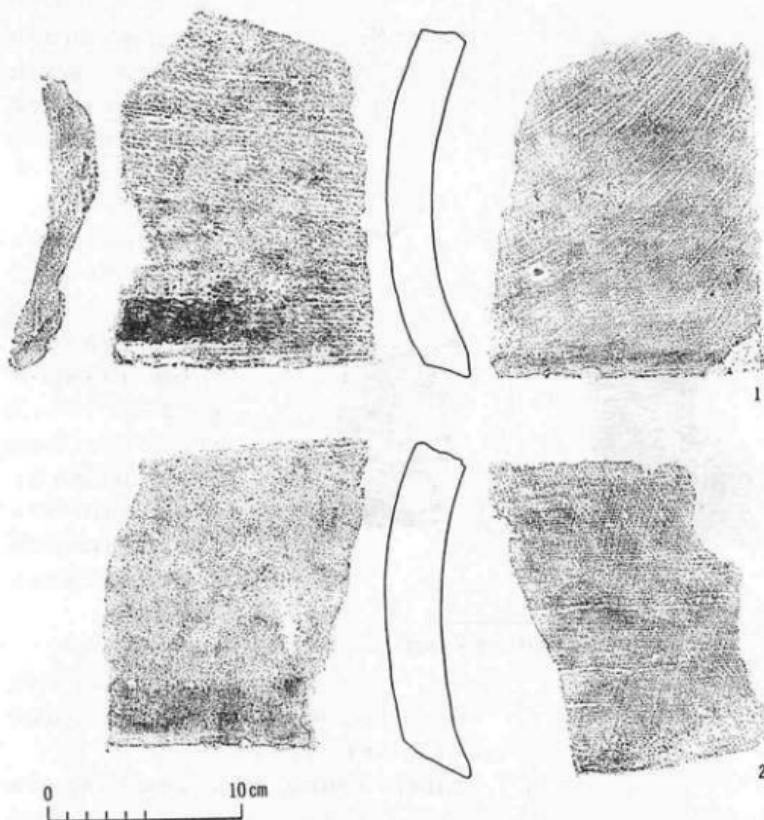
第39図1は丸瓦の凸面に『方』字の印が押されたもので裏字になっている。印の外形はほぼ方形で、文字の上方の角がおとされている⁹⁾。2~4は平瓦の凹面に押されたもので2は『大』字、3・4は類例から見て十字形になるものであろう¹⁰⁾。なお1~4は前期に属するものと思われる。5・6は中期の平瓦と見られるもので、6には『木』字が少なくとも4回は押されている。5も『木』と見られるもので、いずれも真字である。『木』字は『木工』を表すものであろう。7・8は丸瓦凸面にヘラ書きの記号をもつもので、7は3本の平行斜線、8は2本の



第39図 文字・記号瓦拓影

平行斜線にさらに斜線を加えた記号になっている。9・10は十字形の記号のあるもので、9は九瓦凸面、10は軒平瓦の平瓦部凸面である。9も軒九瓦になるかも知れない。

(7) 肋斗瓦



第40図 貝斗瓦拓影・実測図

貝斗瓦と識別できるものはいずれも綠釉品であり、無釉のものは見いだせなかった。第40図は前期の綠釉貝斗瓦で、釉は側面から、凸面の側縁から5cmあたりまでの幅で施されている。成形はほぼ平瓦と同様であるが、やや厚いもので、凹面の中央にヘラで深さ1~3mmの分割線を入れ、焼成後に半截されたものと見られる。胎土には砂を混え、1はやや硬質、2は軟質の焼成である。施釉部分以外、1は淡褐色、2は灰白色を呈している。

(8)面戸瓦

面戸瓦とわかるものは2点のみであった。面戸瓦は原則として軒平瓦と同数は存在するはずであるが、どの遺跡でも出土する瓦類の中で面戸瓦の検出例は數少ない。おそらく屋根葺きの現場で丸瓦を打欠いて用いたもののが多かったと思われる。1・2とも丸瓦の乾燥前の生瓦を加工したものと見られる。1は凸面にナデ調整がなされたもので、胎土には砂を含み、やや硬質



第41図 面戸瓦拓影・実測図

の焼成で灰色を呈している。2は凸面に繩目叩き痕をとどめている。胎土にはあまり砂を含まず、やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰褐色を呈している。

(9) 鬼瓦

鬼瓦と見られるものは3点あったがいずれも小片である。

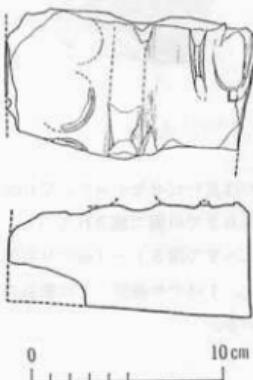
第42図は鬼瓦脚部の破片で、周囲の珠文・界線・牙齒の一部を残している。型造りによるもので、部分的に指ナデで修整されている。側面・裏面はヘラケズリである。胎土には砂を混え、硬質の焼成で灰褐色を呈している。

(10) 鶴尾

全形のわかるものはな

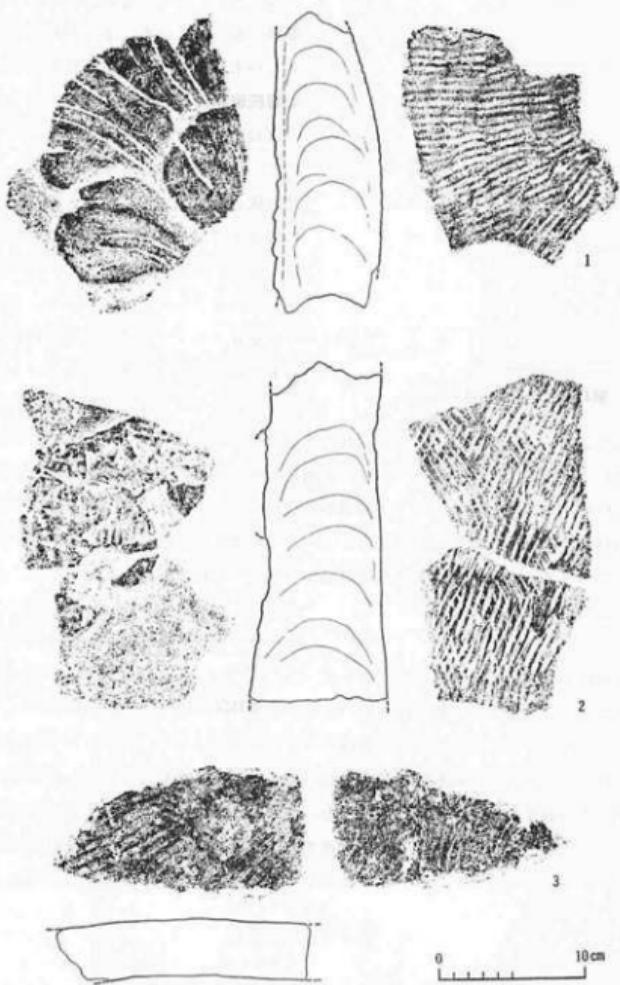
く、いずれも胴部の破片で個体数も不明であるが、綠釉を施したものと無釉のものがある。

第43図1・2は綠釉品で浮彫りのある鶴尾である。1は厚さ約7 cm、2は下端部で約9 cmを測り、かなり大型の鶴尾になるものと見られる。浮彫りは文様部分を別粘土をはりつけて形づくり、細部をヘラで整えたもので、鳳凰を表現している。1は尾羽の部分、2は足首の部分であろう。外面は厚く施釉されているが、火を受けて表面がただれている。内面は平行条線文の當て具の痕があり、外面にも浮彫りの割がれた部分には同様の叩き目が認められる。胎土には砂を多く混えるが、浮彫り部分の粘土は砂を含まず緻密なものである。



第42図 鬼瓦実測図〔縮尺1/2〕

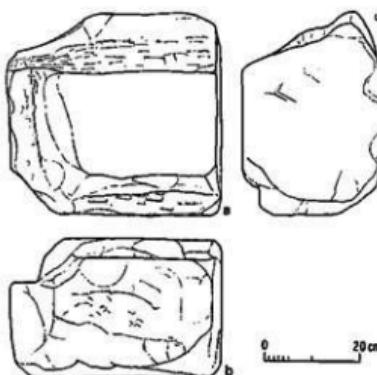
3は小型の鶴尾と思われる。厚さ約4 cmで、無釉である。叩き目は外面が平行条線文、内面が同心円文でどちらもかすかに認められる程度である。胎土には石英粒の目立つ粗い砂を混え、やや軟質の焼成で表面黒色、内部灰色を呈している。



第43図 菊尾拓影・実測図〔縮尺1/2〕

10磚

磚も破片ばかりで全体の復原ができるものはなかったが、いずれも厚さ約14cmの大型のもので、敷瓦の類は認められなかった。成形は型枠の中に、隅の方から順次ひと握り程度の粘土塊を詰めてゆくものらしく、割れ口に指の圧痕の残るものが多い。表面は各面ともヘラ調整がなされている。胎土にはあまり砂を含まず、やや軟質の焼成で、色調は黒から灰白色までさまざま



第44図 漢灰岩石材実測図

が残る程度である。e面は粗くノミで削られたままで平坦にはなっていない。他の面は一応平坦にされているが、多少凹凸が目立つ。なおa面とb面、a面とf面の角部分にはシャクリがつくられている。加工はa面側とb・f面側から交互にノミを入れてなされたものと思われる。この石材は大きさから地覆石かと見られるが、シャクリの部位が疑問でもあり、後に再加工されたものであろう。この他、主に漢灰岩窯から多くの石材片が出土しているが、どの部分に用いられたものかはわからない。

埴土 壁

主にD1瓦窯から出土したので、大きい破片でも半大である。火を受けて焼け固まり、かろうじて形を保っている。壁土には長さ数cmのスサを混入しており、粗い砂や小石も含んでいる。壁の表面には厚さ1~3mm程度で漆喰と見られる白色土が塗られている。なお第45図はこれらの壁土の中に含まれていた土器器皿である。口縁が外反し、さらに端部を立ち上げて丸味を持たせたもので、胎土も緻密でつくりは丁寧である。口縁部の特徴より10世紀後半に属する見られることから、この壁が造られたのは少なくとも朝堂院の第2期以降となろう。



第45図 土壌混入土器実測図〔縮尺1/2〕

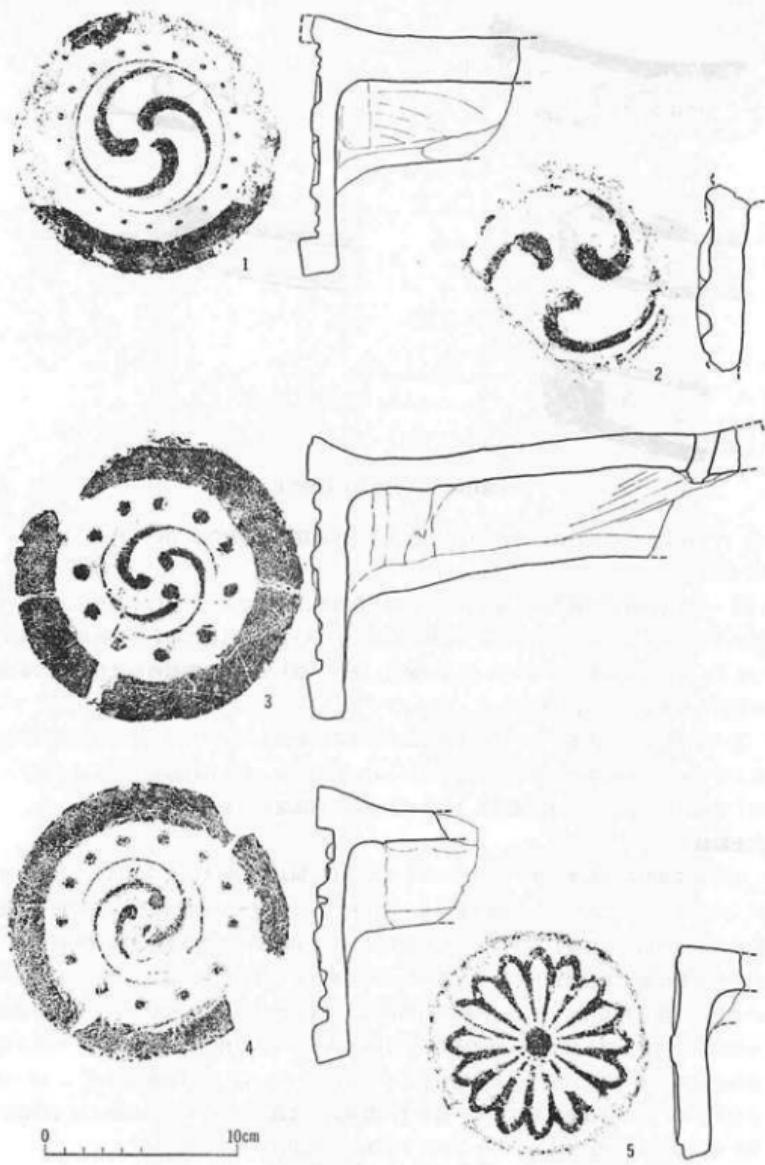
2. 江戸時代の遺物

(1)瓦 類

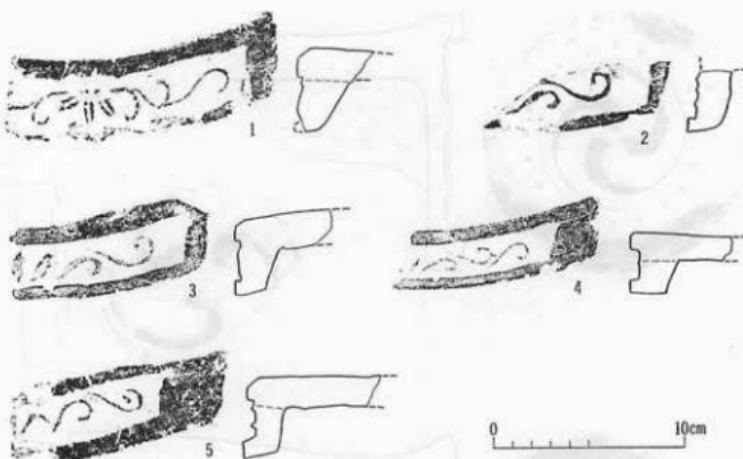
第46図1は頭部がやや尖る左巻き三巴文の軒丸瓦で、成形・調整などはかなり丁寧になされている。丸瓦部は厚手のもので、凹面の布目は細かく、糸切り痕も残っている。胎土には細かい砂を含み、やや硬質の焼成で青味がかった灰黒色を呈している。2は頭部の巻き込みの強い右巻き三巴文の軒丸瓦で、周囲は欠失しているため珠文の有無はわからない。胎土には砂を含み、硬質の焼成で灰色を呈している。1・2とも江戸時代の瓦より文様や造りに古い要素が認められ、室町期に遡るものかと思われる。ただしこの軒丸瓦以外、室町期の遺物は認められ

ざまである。なお図版第22の1には一部赤色顔料が塗られている。また割れ口に、広葉樹らしい木葉の痕跡が認められるものもある。
〔参考〕
〔参考〕

第44図は地下室壁解体作業中に出土したもので、作業箇所がC2であるため、この石材は漢灰岩窯に関するものかと思われる。各面に残るノミ痕などから見て元の形を保っているもので、あまり風化はしていない。仮に各面を図のようにa・b・cとし、その反対側の面をd・e・fとする。b面が6面の中で最も平滑に仕上げられており、ノミ痕も残っていない。c面もほぼ平滑で部分的にノミ痕



第46図 軒丸瓦拓影・実測図(6)



第47図 軒平瓦拓影・実測図(4)

ず、いずれも江戸時代以降の遺物と伴出しておる。江戸期の瓦に混って用いられていたものと思われる。

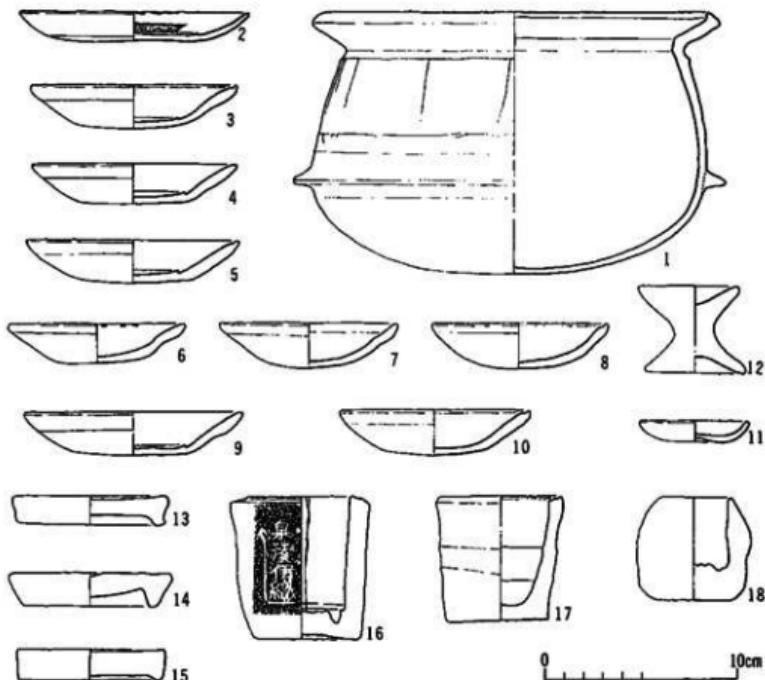
3・4は江戸時代の軒丸瓦と見られるが、細かな時期は確定できない。いずれも胎土に粗い砂を含むが多くはなく、軟質の焼成で暗灰褐色を呈している。5は棟に用いる装飾用の小菊瓦である。胎土は砂を混えるもので、焼成は軟質、灰色を呈している。類似の例は現在の二条城の建物にも多く用いられている。

第47図は軒平瓦である。いずれも文様は簡単な唐草文を表したもので、瓦当部は平瓦端に別粘土を付加して形成され、接合面には櫛目が入れられている。胎土には砂を含むものが多く、概して軟質の焼成で、3は暗灰褐色、他は表面黒色、内部灰白色を呈している。

(2) 土器類

土器類は量的にはあまり多いものではなかった。土器類が比較的まとまって出土したのは井戸1内とその周辺であった。第48図1~8・12は井戸1に関連するもので、他は主に粘土採掘坑の埋土中の出土である。羽釜は1の他、数個体分あるがほぼ同形態のもので、17世紀代の江戸時代初期に属すると思われる。2は茶褐色の釉が施された灯明皿で、見込みに灯心おさえの滑り止めの櫛目が入っている。3~10も灯明皿で、口縁にスヌが付着している。いずれも軟質の焼成で淡褐色を呈している。11は灰白色の小皿である。スヌの付着は見られない。12は小型の高杯状の手捏土器で、上下とも同様の形につくられている。13~15は焼塩壺の蓋で、16~18は身である。蓋と身はかならずしも一致せず、数量的には蓋の方が多い。なお16には『泉湊伊織』の刻印があり¹¹⁾、『なんばん七度本やき志本』の刻印銘の蓋もある。

この他、泥面子や伏見人形などの玩具類も出土している。



第48図 土器類実測図

(3) 陶磁器類・その他

陶磁器類は主に粘土採掘坑の埋土中から多く出土している。図版第24に掲げた例の他多量にあり、当時日常用いたものであろう。陶磁器類は整理が充分に済んでいないため、ごく一部を例示した。

その他金属製品では『寛永通宝』、きせるの雁首、吹口などがある。

註

- 1) 高野孤庵「昔」および「昔圓」の銘のある古瓦について」(福岡市教育委員会編『草場古墳群斜ヶ浦瓦窯址』所収、福岡、昭和49年)。
- 2) 前原平三郎『浦の原池窯跡出土花文斜格子目叩き平瓦』(『地域相研究』第7号掲載、北九州、昭和52年)。
- 3) 石松好雄・高橋章『太宰府出土の瓦について(二)』(『九州歴史資料館研究論集』4所収、太宰府、昭和53年)、第2図31。
- 4) 前原平三郎『筑前国分寺講堂址西側空地出土古瓦』(『古文化研究会会報』No.22掲載、北九州、昭和55年)。
- 5) 石松・高橋前掲論文、第2図24。

- 6) 九州歴史資料館編『太宰府史跡、昭和48年度発掘調査報告』(太宰府、昭和49年), 第33図6。
- 7) 平安博物館編『平安京古瓦圖録』(東京、昭和52年), 瓦番号745。
- 8) 同上, 瓦番号741。
- 9) 同上, 瓦番号, 755。
- 10) 同上, 瓦番号, 753。
- 11) 渡辺誠『松本城二の丸跡出土の瓦塗瓦』(『信濃』第34巻第1号掲載, 松本, 昭和57年) 参照。

第4章 出土瓦について

今回の調査では、平安時代に限定できる遺構としてはD1瓦窯があり、遺物ではその大半が瓦類であったため、以下平安時代の瓦類についてのまとめを行ない、考察にかかる。

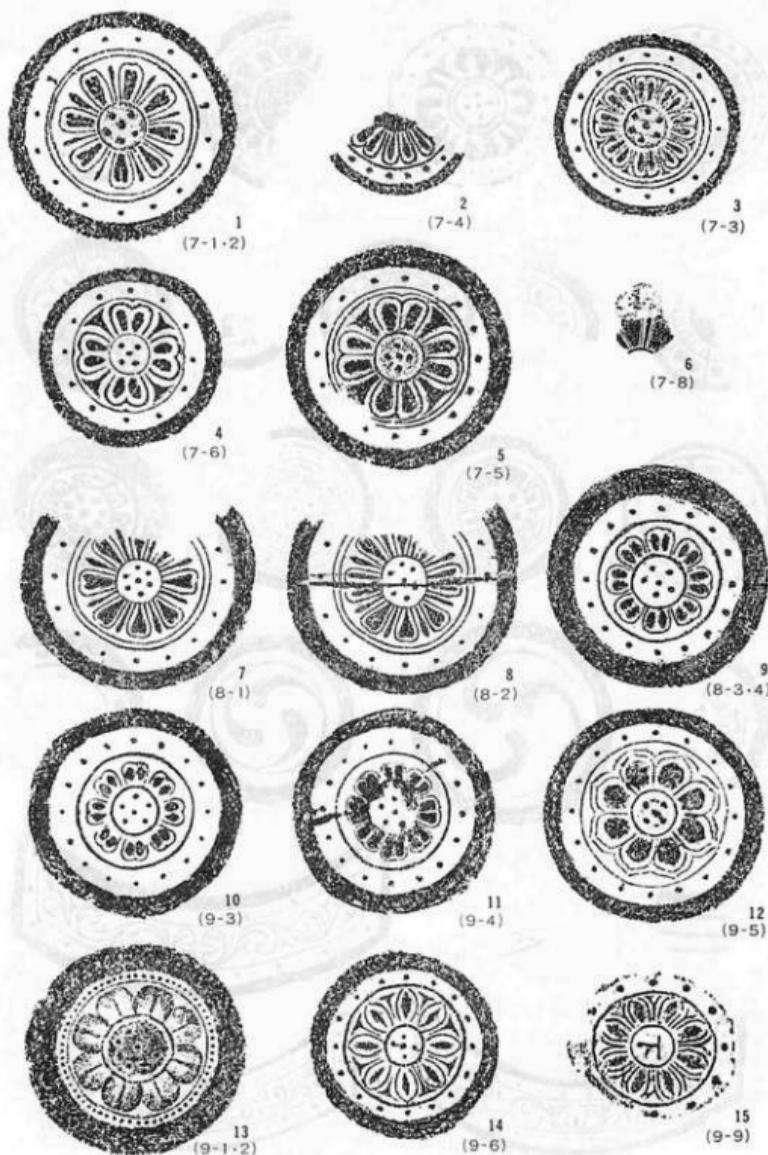
今回出土の軒瓦類はほとんどが破片であるため、瓦当文様の復原を行ない一覧図とした(第49~51図)。復原にはできるだけ同範例の拓影等を用いたが、一部軒丸瓦は同一拓影を回転して復原したものも含んでいる。同文例が多く、まぎらわしいものは復原していない。以下軒瓦はこの一覧図に基づいて記述していく。

まずおよそ年代順に軒瓦類を見て行くと次のようになる。9世紀前半代までの平安時代前期に属する軒瓦には1~3・33~39がある。1・35は緑釉品で、平安京の瓦の中では最も大型の部類に入る瓦である。この組合せは朝堂院跡の他、豊樂院跡でも出土しており、平安宮所用瓦の中でも特に重要な建物に用いられたものであろう。3・36は岸部瓦窯産と見られ¹⁾、朝堂院跡をはじめ、平安宮跡での出土が多いものである。2は同範例を見出せなかつたが、これに近い文様構成をとる軒丸瓦は朝堂院跡より数種類出土しており²⁾、2を含めていずれも西賀茂瓦窯産の瓦の胎土や焼成とはほぼ同様のものが多い。38は西寺系の軒平瓦であるが、平安宮跡でも多く出土し、西賀茂瓦窯などの平安京周辺の官窯産の瓦と同じような供給のされかたである。

9世紀後半代では4・5・40・41などの文様系統の瓦がある。この段階より平安京の官窯では軒丸瓦の成形に一本造りの技法が導入されたようである。布目も粗くなる傾向にある。この文様系統に属するものは、軒丸・軒平瓦とも多數製造されており、42~44も40の系統を引くと見られる。この系統では5・40が文様も比較的整っており、9世紀中頃のものかと思われる。

6~8・45・46が1・35の文様をまねたものであることは図のとおりであり、全体の大きさも同様で、いずれも緑釉が施されている。ただし造瓦技法は異なり、軒丸瓦は一本造りによるもので、軒平瓦は45の同範例³⁾によると、頸部から平瓦部凸面にかけて大きくヘラケズリされ、四面の布目もかなり粗いものになっている。ただ46は35と同様の造りである。これらの軒瓦は前期の1・35に文様・大きさをそろえたもので、その補修用の瓦と見られる。あまり確証はないが、46以外は10世紀前半代のものであろう。

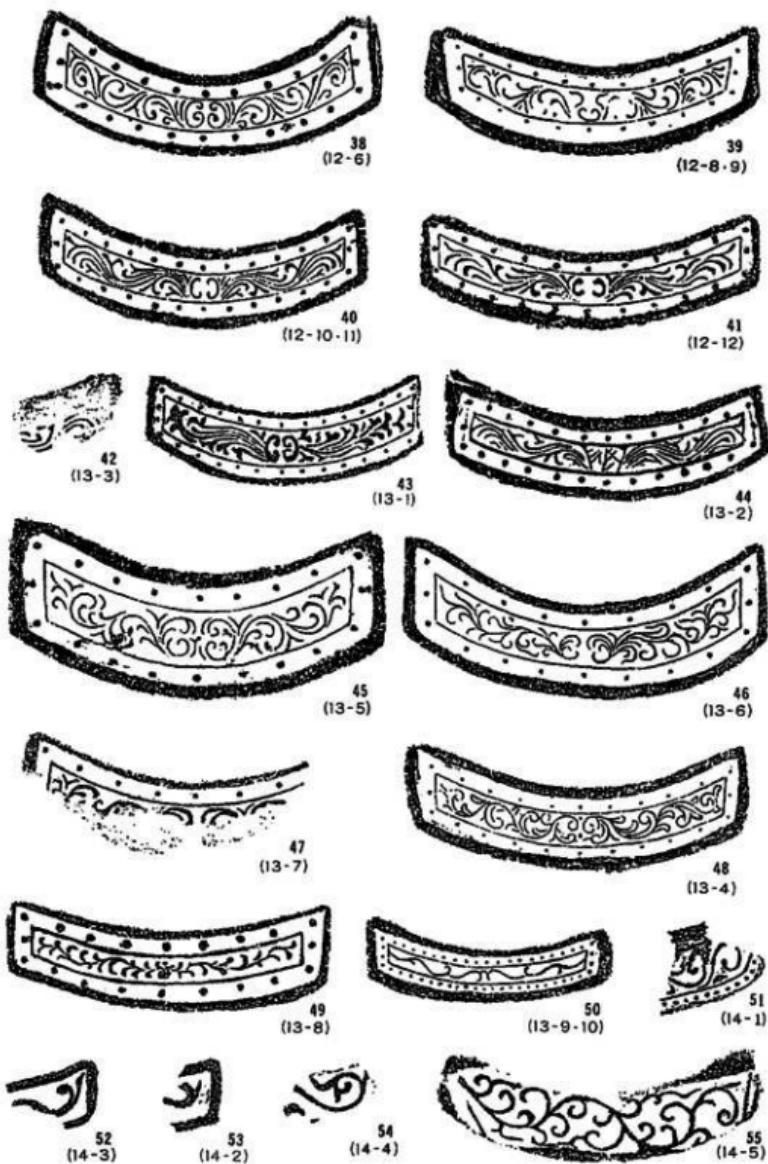
9~12は一本造りによる緑釉軒丸瓦である。9~11は同じ文様構成をとっている。12は花弁の先端部が複線で表されており、この同文例に『左』銘をもつ緑釉瓦がある。この例は仁和寺で出土しており⁴⁾、延喜四年(904)の円堂院創建時の瓦と見られるため、12もこれと同時期の



第49図 出土軒瓦一覧図(1)〔縮尺1%, ()内は種類番号〕



第60圖 出土軒瓦一覽圖(3) (縮尺3%)



第61図 出土軒瓦一覧図(3) [縮尺1/2]

瓦と思われる。9~11および13も12と併出する¹⁰ことから、これらも同じ頃と見られる。15は珠文帯までの大きさで無軸であるが、周縁部もつくられた綠釉品が朝堂院跡で出土しており¹¹、これもほぼ同時期かと思われる。なお10は小野瓦窯の産で、平安宮跡では周縁部のない無軸の瓦も出土している。48も小野瓦窯の軒平瓦で、仁和寺円堂院跡では綠釉品が出土しており¹²、これも10世紀前半に比定できる。49はやや遅れ、10世紀後半代のものであろう。

11世紀代の瓦についてはあまり明確にできないが、16は豊楽院跡出土例などから、その前半代頃のものと思われる。22・50は造瓦技法から見て、11世紀中頃から後半にかけての時期であろう。

17~19・51は丹波系の瓦である。丹波系瓦の平安京での初現は法成寺創建頃の11世紀中頃と見られるが、丹波系瓦の多くは12世紀代に属するものと思われる。18・51の同文例はそれぞれ20種以上つくられているようで、同范例の確認はできなかった。今回出土の丹波系瓦の中では17が11世紀代。他は12世紀代であろう。20・21・54・55は播磨系の瓦である。これもそれぞれ同文例が多く、同范例を確認できなかったが、いずれも12世紀代のものである。

24~32・54・55は尊勝寺跡など12世紀代の後期の遺跡に類例を見るものである。24は尊勝寺跡出土例¹³を基にしたもので、同文例も数種あるが、瓦当周囲の縦目叩き痕などから同范と推定した。25も尊勝寺跡出土例¹⁴を基にしている。30も尊勝寺跡でも出土する瓦¹⁵で、文様は室町期の巴文のような形状を呈しているが、造瓦技法は12世紀代の特色をもっている。この軒丸瓦は後期瓦としては大型で、前期瓦に近い大きさである。大極殿や金堂などの大規模な建物用につくられたものであろう。55も各所で出土する軒平瓦であるが、復原図のような大きさのものではなく、いずれもこの瓦飽より瓦当面の小さな例ばかりである。

朝堂院跡出土瓦の様相については別稿¹⁶を参照されたいが、今回得られた資料からも、從来知られている資料に見られることと同様の特色がうかがえる。すなわち、前期段階の瓦では1・35の綠釉瓦が多く、前代の宮型式瓦も含まれていること。中期段階でも綠釉瓦が多く、当時の各官窯から供給を受けており、前期・中期瓦が出土瓦の主体をなすこと。そして丹波系・播磨系瓦などを含む後期の瓦も少なからず認められること、などである。

次に一括資料となるD1瓦溜出土の瓦類の整理を行なう。D1瓦溜出土の軒瓦は、第7図1・2(一覧図番号1), 3(同3), 6(同4), 第8図3(同9), 第9図3(同10), 4(同11), 5(同12), 第12図4(同35), 第13図5(同45)である。丸・平瓦では、第15図1・2, 第17図1, 第18図, 第19図, 第21図4, 第22図, 第26図, 第27図2・3, 第30図8, 第31図2・3, 第32図および第34図3・4であり、第38図3, 第39図5, 第40図2もD1瓦溜出土である。

軒瓦には前期から中期に属するものが含まれており、後期瓦は見られない。丸・平瓦も前期と中期の瓦が主体となっており、第32図の平瓦については疑問があるが、他は11世紀前半代までに取まるものと思われる。なお、今回の出土瓦の中で比較的目立った第16図の丸瓦類や第29図のような斜格子文叩き目の平瓦類は含まれていない。

軒瓦や丸・平瓦の割合は、個体数の識別が困難であるため、重量比で計算すると、次のような結果が得られた(第1表)。なお比較のためE5瓦溜出土の平安時代の瓦類についても掲げ

ておく。

第1表 瓦溜出土瓦類の重量比

	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦	質斗瓦	計
D 1 瓦溜 重量(kg) %	8.83	6.26	153.68	338.83	13.33	520.93
	1.7	1.2	29.5	65.0	2.6	100.0
E 5 瓦溜 重量(kg) %	7.58	29.38	328.46	914.58	57.55	1337.55
	0.6	2.2	24.5	68.4	4.3	100.0

先にふれた朝堂院跡出土瓦の様相で、一つの特徴となる綠釉瓦の使用量はどの程度であろうか。D 1 瓦溜でも綠釉品が目立ったが、軒丸瓦・丸瓦の中で綠釉品のしめる割合は重量比では次のようになった。

まず軒丸瓦と丸瓦の総重量は 162.51kg であり、この内綠釉品は 83.15kg であった。したがって綠釉品は 51.2% となり、約半数をしめている。

同様にして E 5 瓦溜出土瓦では、336.04kg : 157.19kg となり、綠釉品は 46.8% となる。この数値は重量比であるため厳密なものとはならないが、平安宮の朝堂院主要部における綠釉瓦使用の割合の大まかな目安にはなるものと思われる。

最後にこの D 1 瓦溜の年代について整理する。平安宮の朝堂院は創建以来 4 度の火災に見舞われている。ただし、貞觀八年(866)閏三月十日の火災はいわゆる『応天門の変』で、焼失は応天門付近に限られているためこれを除外すると、調査地周辺の朝堂院北部にかかる火災は次の 3 度となる。

- ①貞觀十八年(876)四月十日
- ②天喜六年(康平元年: 1058)二月二十六日
- ③安元三年(1177)四月二十八日

D 1 瓦溜に含まれる瓦類は火を受けたものが多く、焼土や焼け固まった土壁からも①～③のいずれかの火災の後始末であることは明らかであろう。軒瓦や土壁に混入していた土器の年代から、まず 9 世紀代の火災である①は除外される。③は朝堂院のみならず、内裏などの平安宮の主要部分が焼失した大火である。平安博物館が行なった大極殿推定地の調査¹²⁾でも③によるものと見られる焼瓦が出土しているが、D 1 瓦溜にはこの時期の瓦類が含まれていない。したがって D 1 瓦溜は 11 世紀代の②の火災にかかる可能性が最も大きいことになる。ただこの瓦溜も部分的であったため、断定は留保し、今少し資料の増加を待ちたい。

註

- 1) 大阪府教育委員会編『岸部瓦窯跡発掘調査報告』(大阪、昭和43年)。
- 2) 佐々木英夫編『平安宮朝堂院跡永寧堂跡の発掘調査』(京都、昭和52年)、第6図2。京都市埋蔵文化財研究所編『坂東普平収藏品目録』(京都、昭和55年)、拓影図番号49など。
- 3) 『平安京古瓦圖錄』(前掲)、瓦番号413。
- 4) 木村捷三郎『仁和寺出土の綠釉瓦』(『佛教藝術』

- 115号掲載、東京・大阪・北九州・名古屋、昭和52年)。
- 5) 『平安京古瓦図録』(前掲)、瓦番号108・109・113~116。
- 6) 同上、瓦番号99・100。
- 7) 駐4に同じ。
- 8) 奈良国立文化財研究所編『尊勝寺跡発掘調査報告』(『奈良国立文化財研究所学報』第10回所収、奈良、昭和36年)、型式番号96B。
- 9) 同上、型式番号23A。
- 10) 同上、型式番号102。
- 11) 植山茂『平安宮所用瓦の様相』(『角田文庫博士古代学研究』所収、京都、昭和58年)。
- 12) 片岡雅綱『平安宮大極殿跡の発掘調査』(『平安京跡発掘調査報告書』第1輯、京都、昭和51年)。

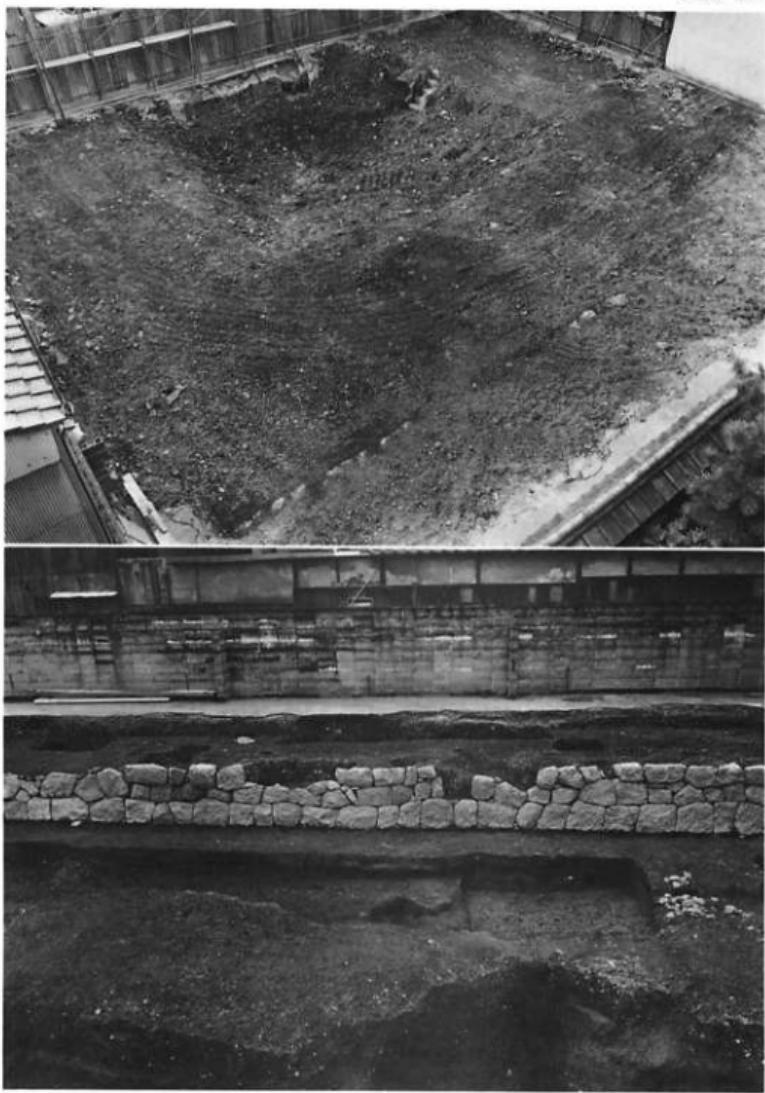
おわりに

今回の調査では直接、平安宮朝堂院に関する遺構は検出できなかった。大極殿跡と推定される千本丸太町交差点周辺での従来の調査でも直接、朝堂院に関する遺構の発見はなく、朝堂院北部の遺構検出の困難さをあらためて確認する結果となった。ただし、今回の調査で黒灰岩細片を含む整地層と見られるものが、ある程度、面的にとらえられた。時期については断定しかねるが、朝堂院の整備あるいは廃絶後の整地に伴うものかと思われる。朝堂院推定地内では今回の調査地より南の数個所で十二堂の一部と見られる遺構も検出されている。この調査地付近でも、地山に達する後世の削平・攪乱をかなり広範に受けているが、少なくとも江戸時代以前の包含層が残っている部分もあり、今後の調査で朝堂院の遺構が発見されることも期待できよう。

出土遺物の点では平安時代の瓦類が多量に得られた。特に緑釉品の多いことからも、これらが朝堂院に使用された瓦であることは確かである。言うまでもないが今後とも遺物、特に瓦類の研究を進めることも平安宮の朝堂院を明らかにする上で重要な方法になろう。

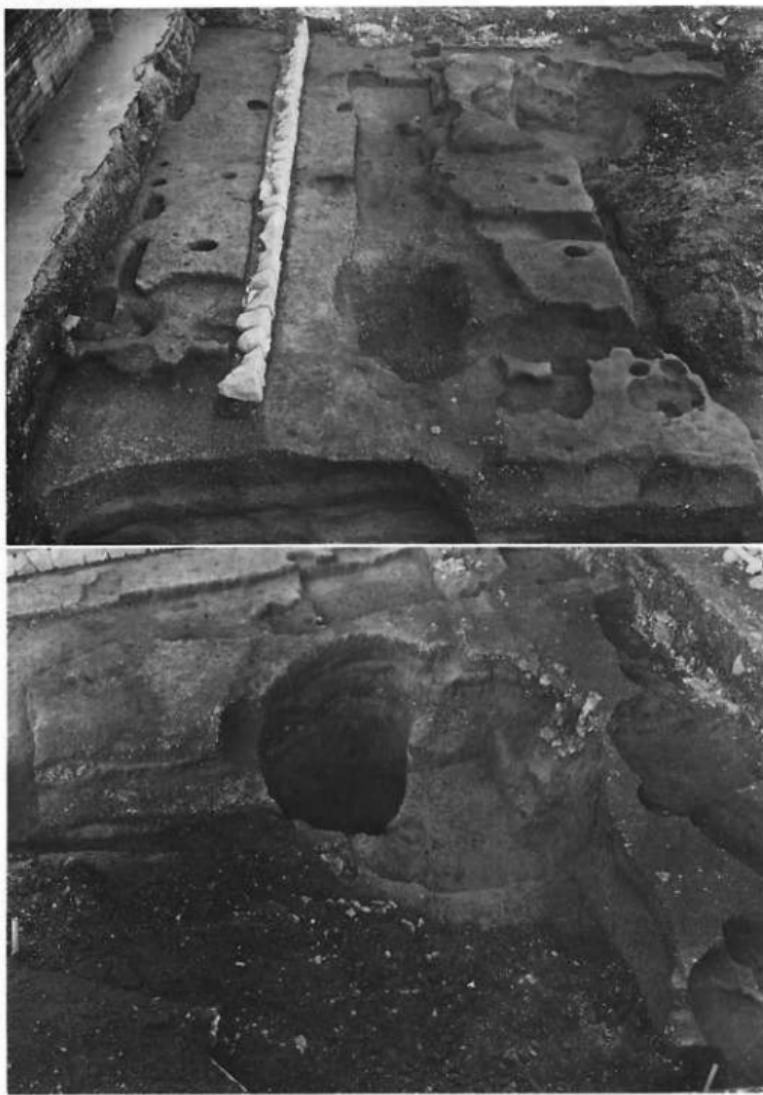
今回の調査では必ずしも充分な成果があったとは言えないが、朝堂院解明の一助ともなれば幸いである。

なお発掘調査中には、建築工事を担当される大成建設の方々にも事務所の提供などお世話いたいたいた。末尾ながら御礼申し上げる。



上：発掘前調査地全景（東北より）、下：石垣（南より）

図版 第2

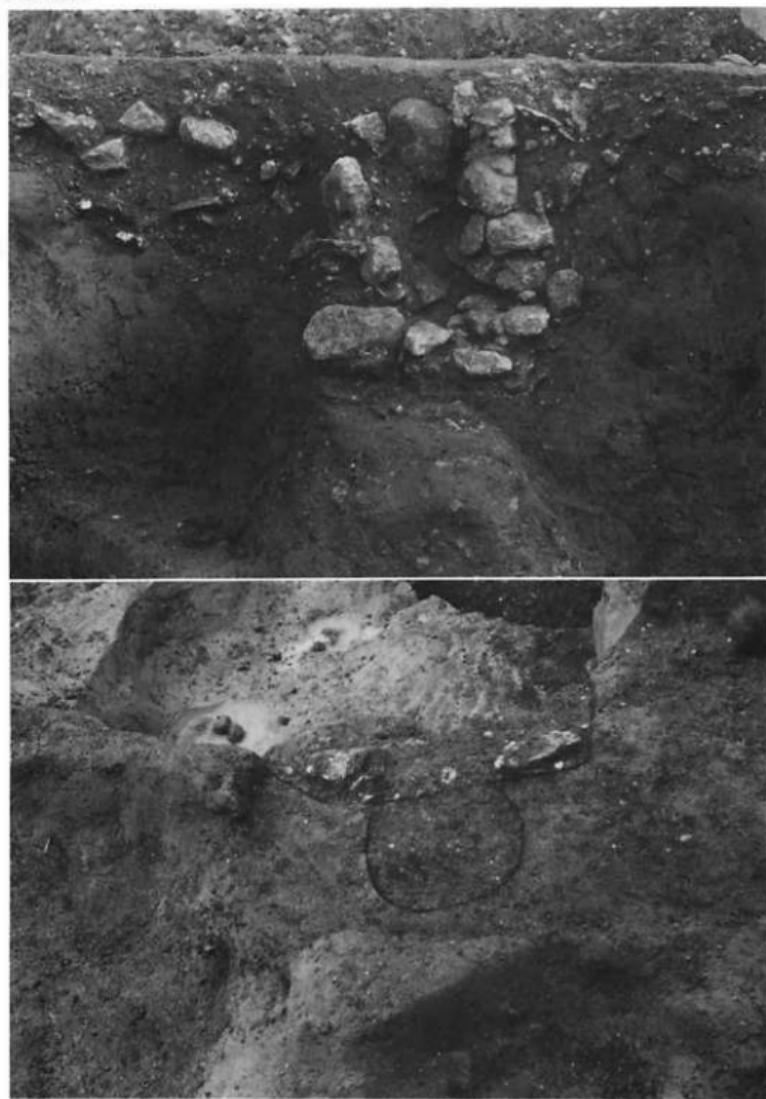


上：北部造構検出状況（西より）。下：東北部造構検出状況（南より）



東部道橋検出状況(左:南より、右:北より)

図版 第4

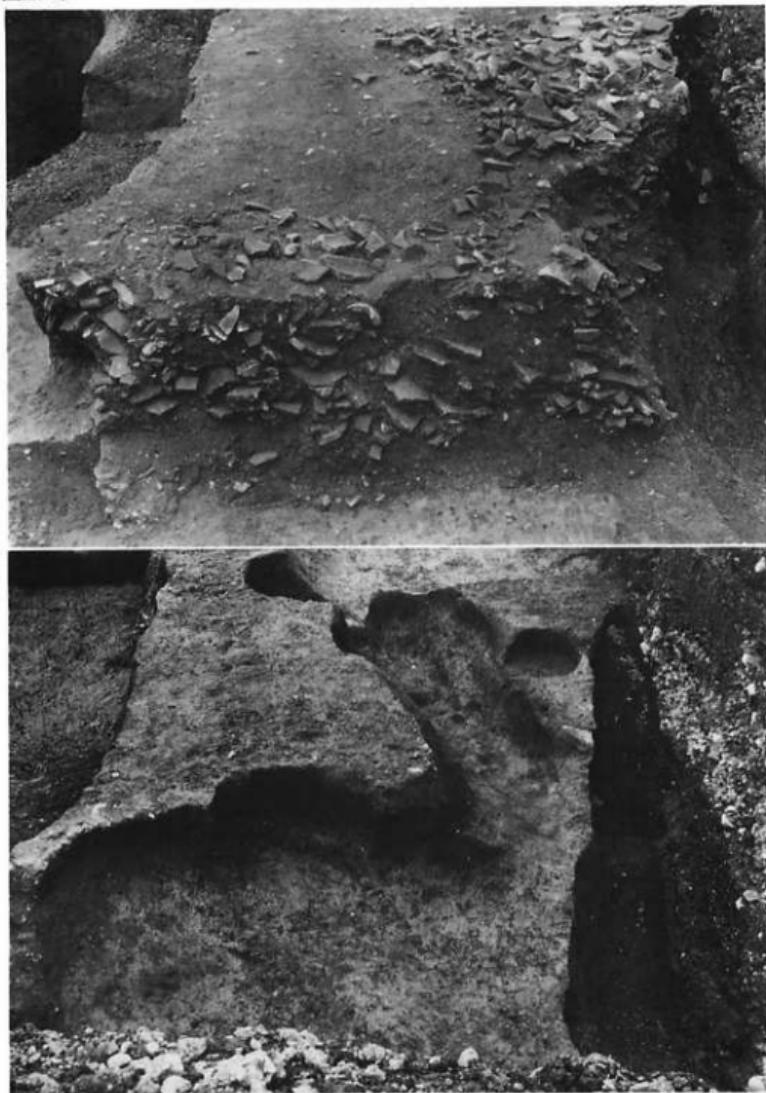


上:凝灰岩溜断面、下:凝灰岩溜・柱穴3(東より)



左:柱穴3(東より)、右:柱穴2(西より)

図版 第6



D1 瓦溜(南より; 上:検出状況, 下:完掘状況)



E 5 瓦窯(南より; 上:検出状況, 下:完掘状況)

図版 第8

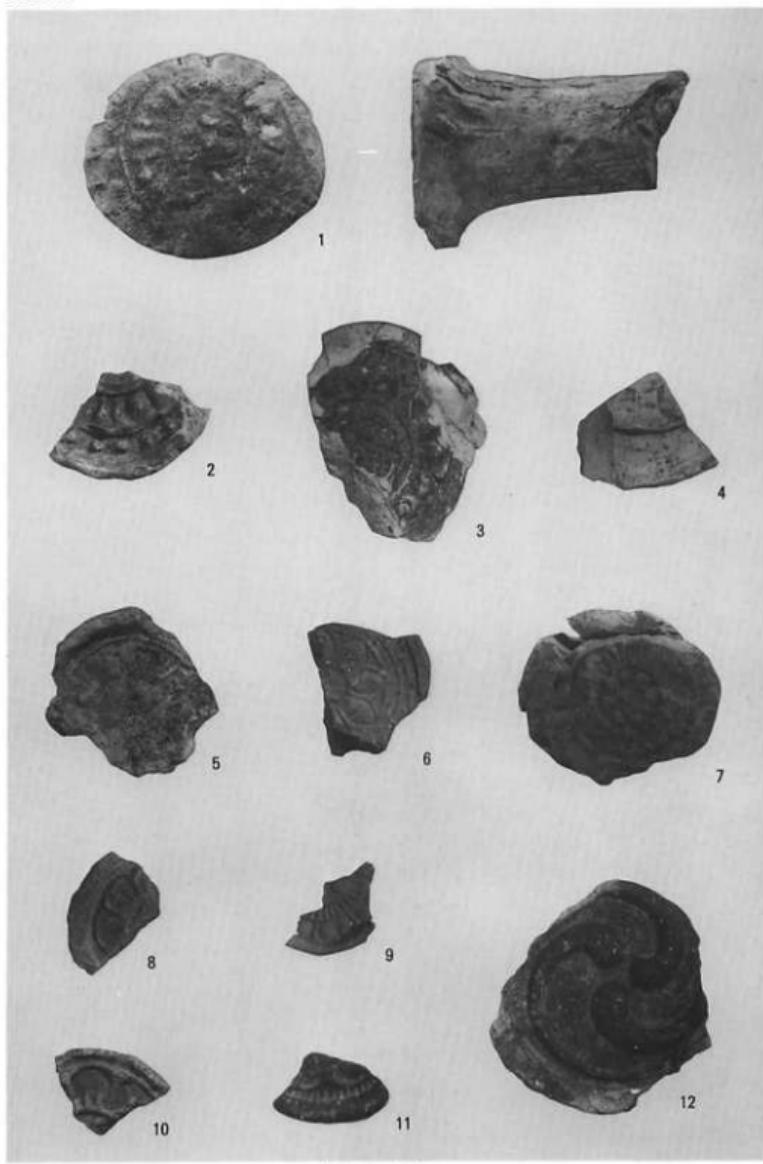


粘土採掘坑(北より)

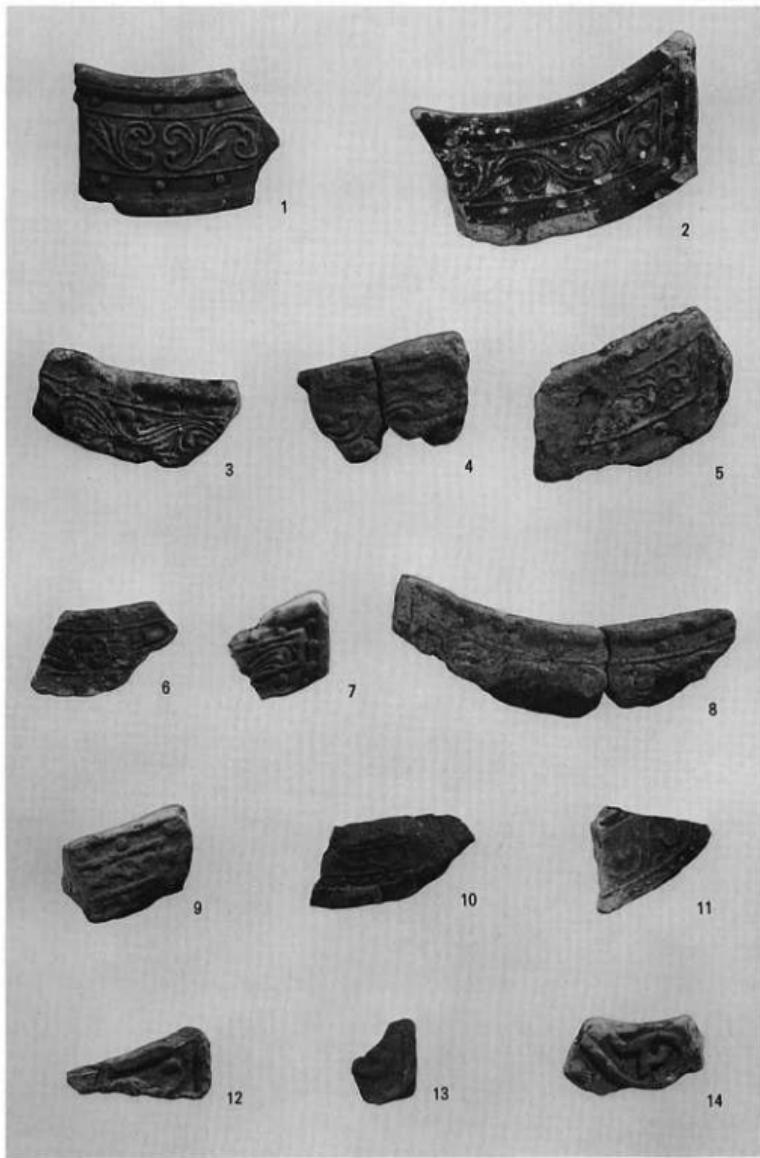


出土遺物 軒丸瓦(1)

图版 第10

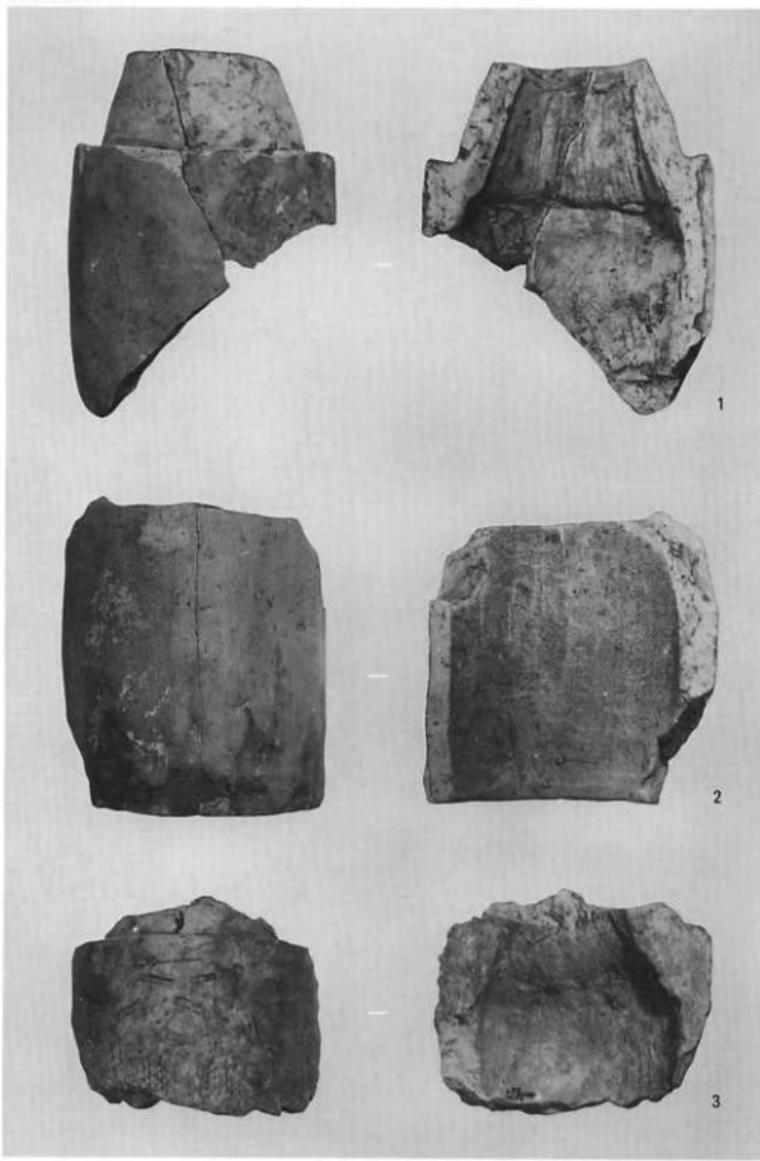


出土遗物 轩瓦(2)

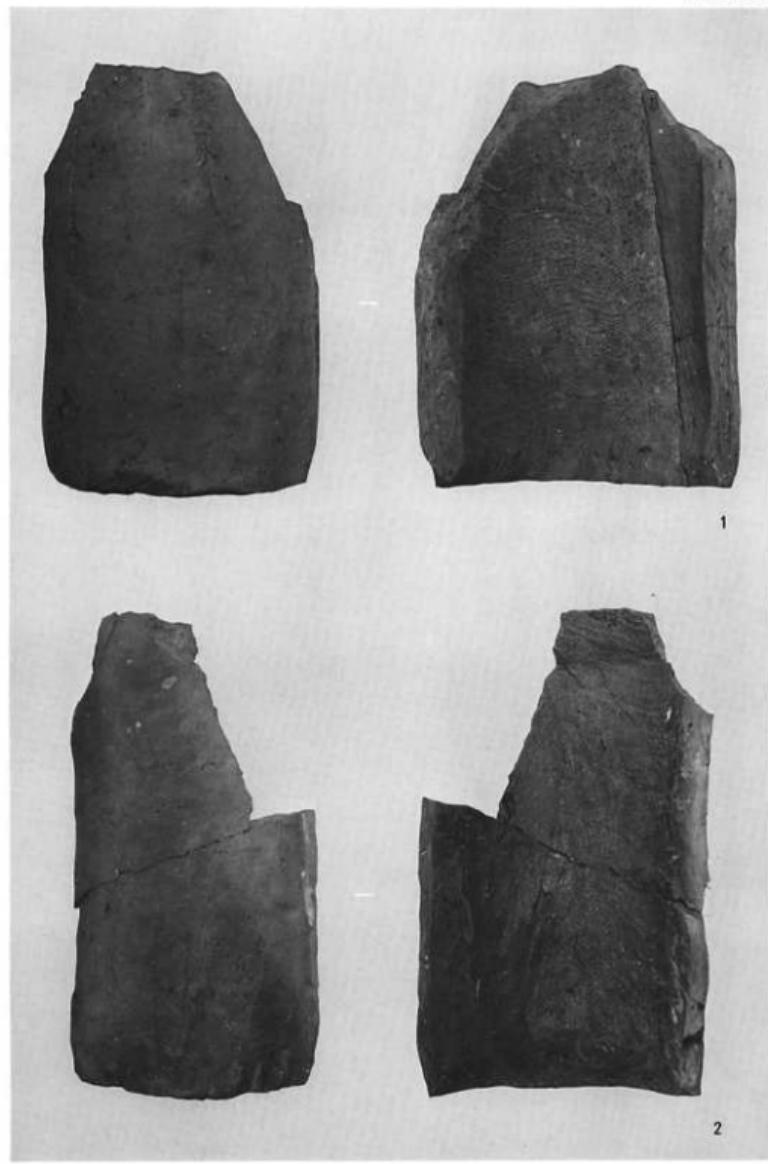


出土遺物 軒平瓦

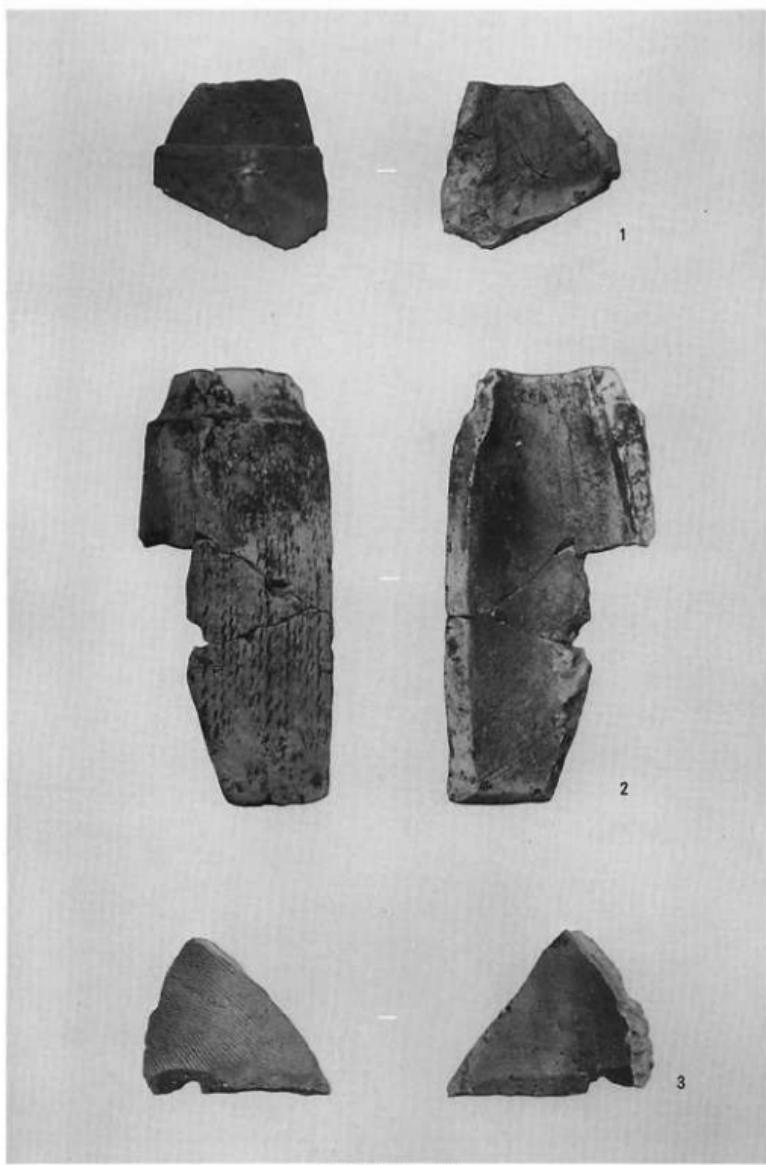
図版 第12



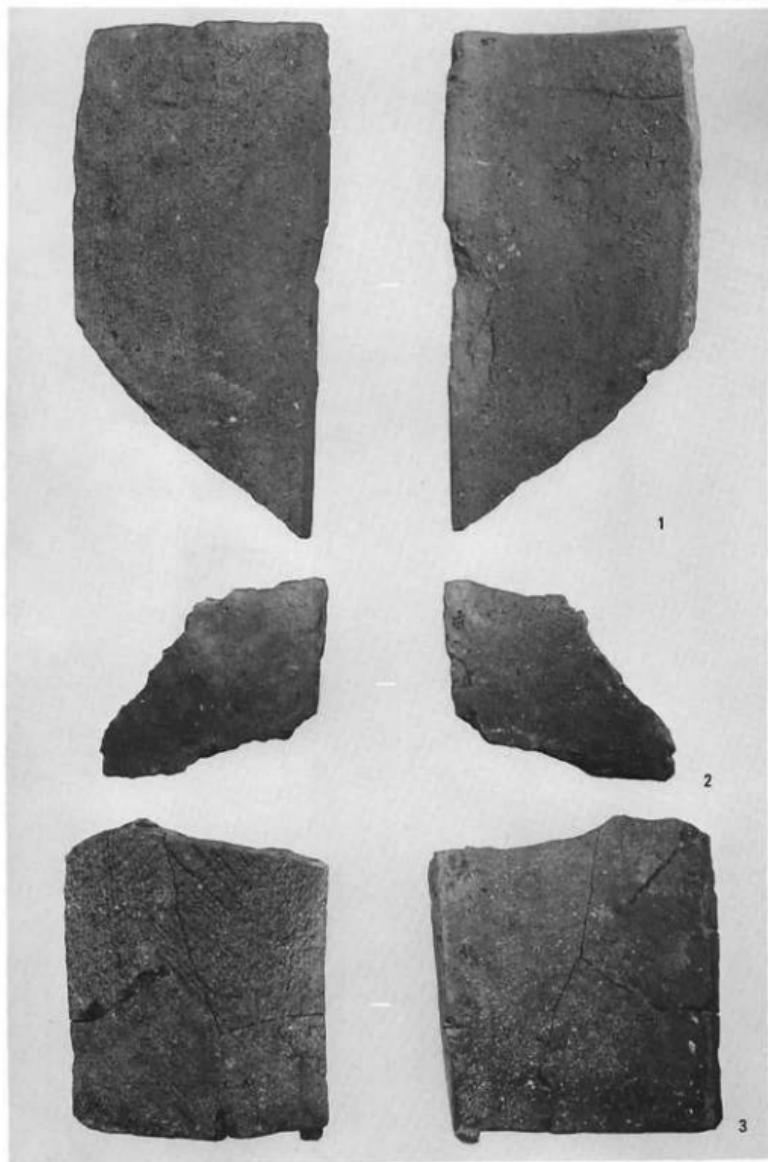
出土遺物 丸 瓦(1)



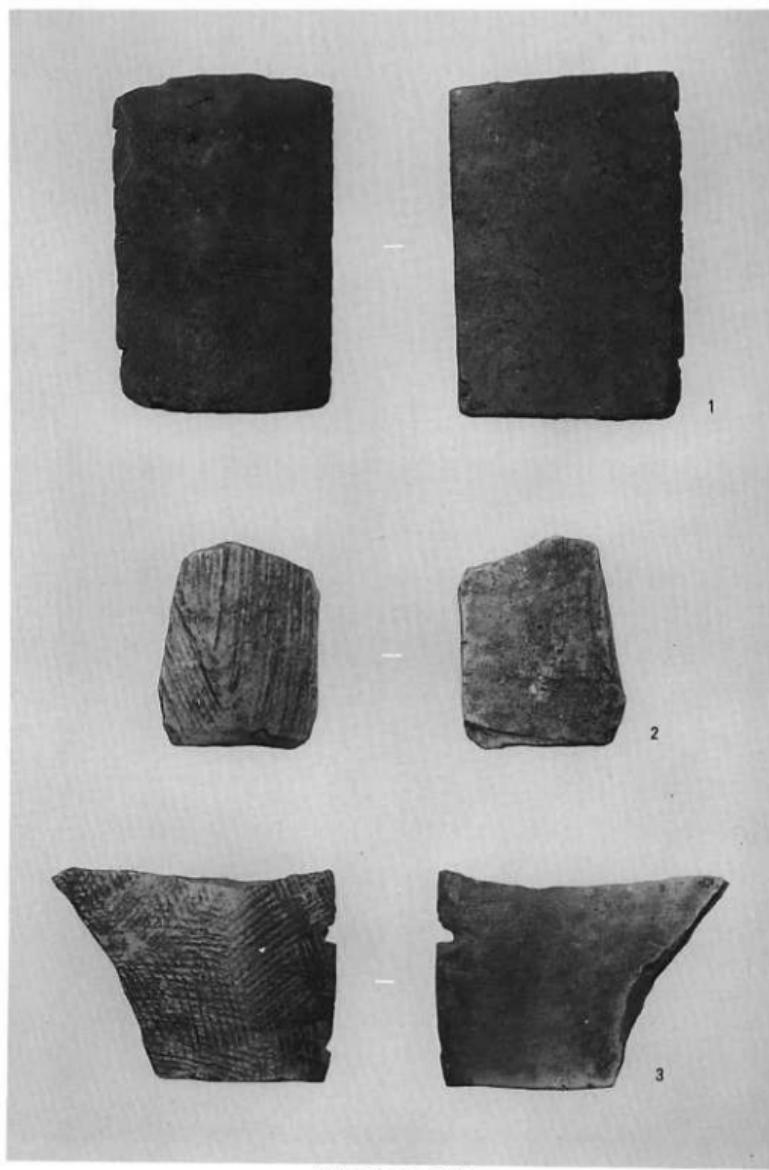
出土遺物 丸 瓦(2)



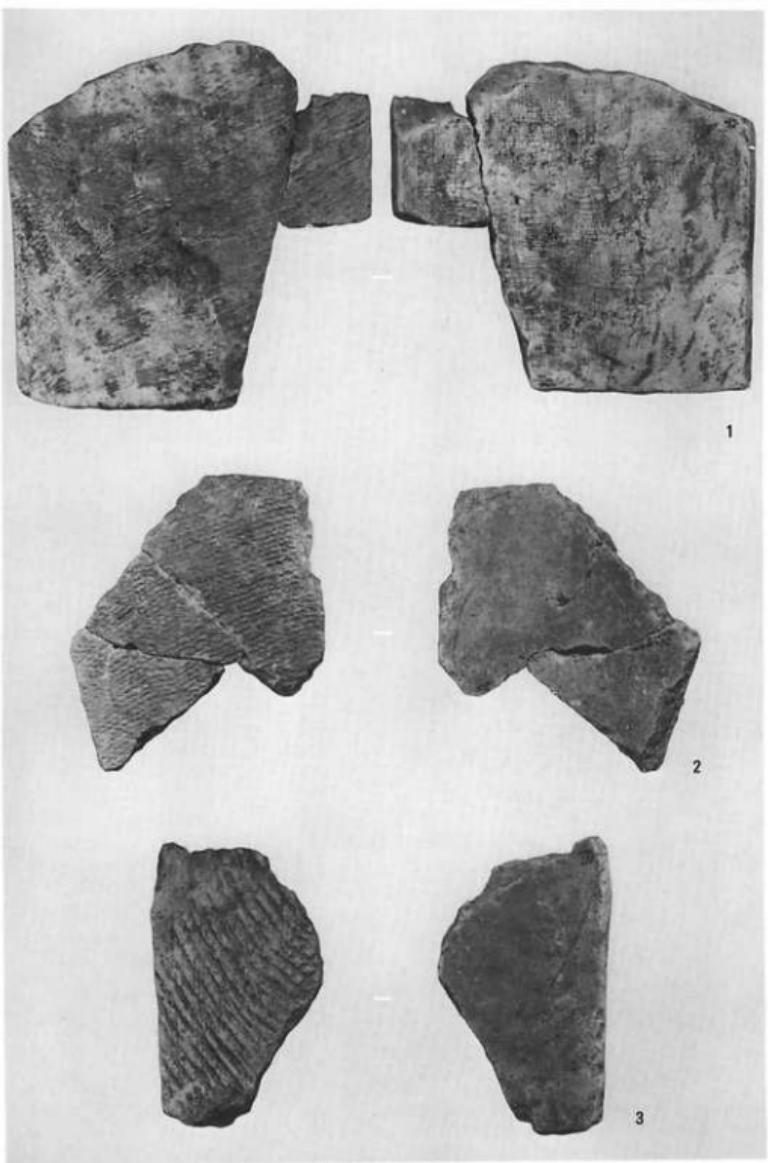
出土遺物 丸 瓦(3)



出土遺物 平 瓦(1)

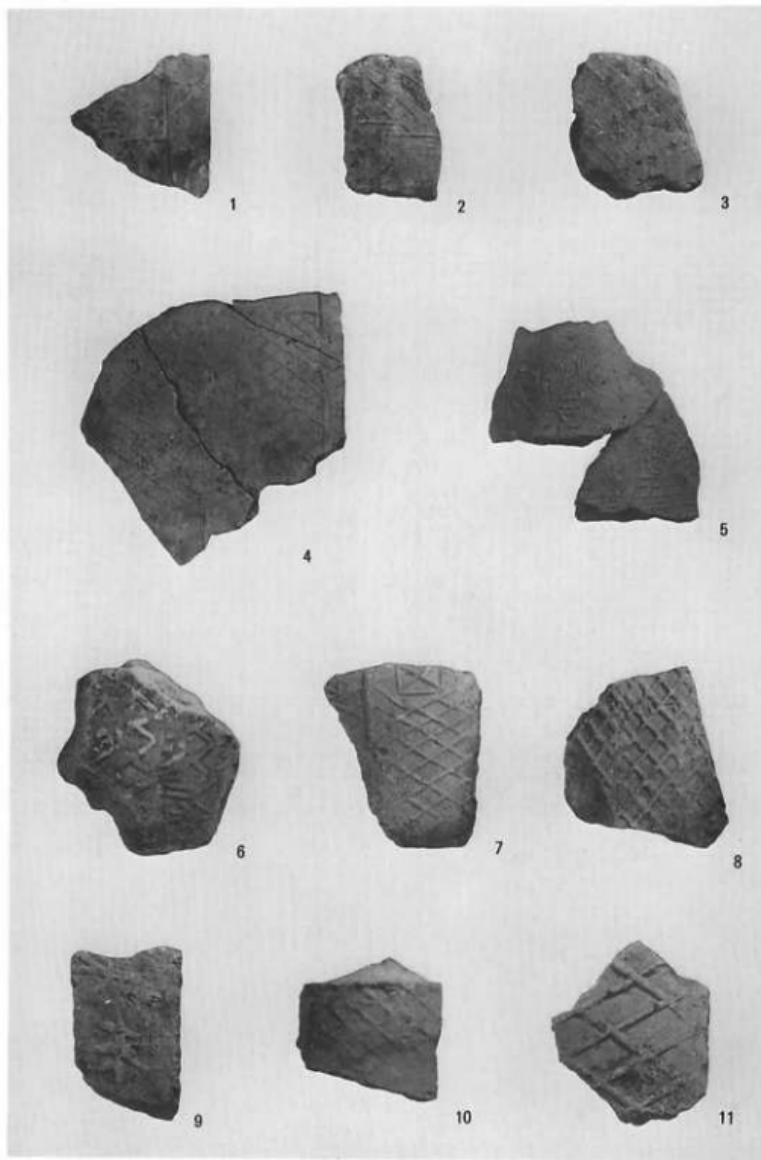


出土遺物 平 瓦(2)

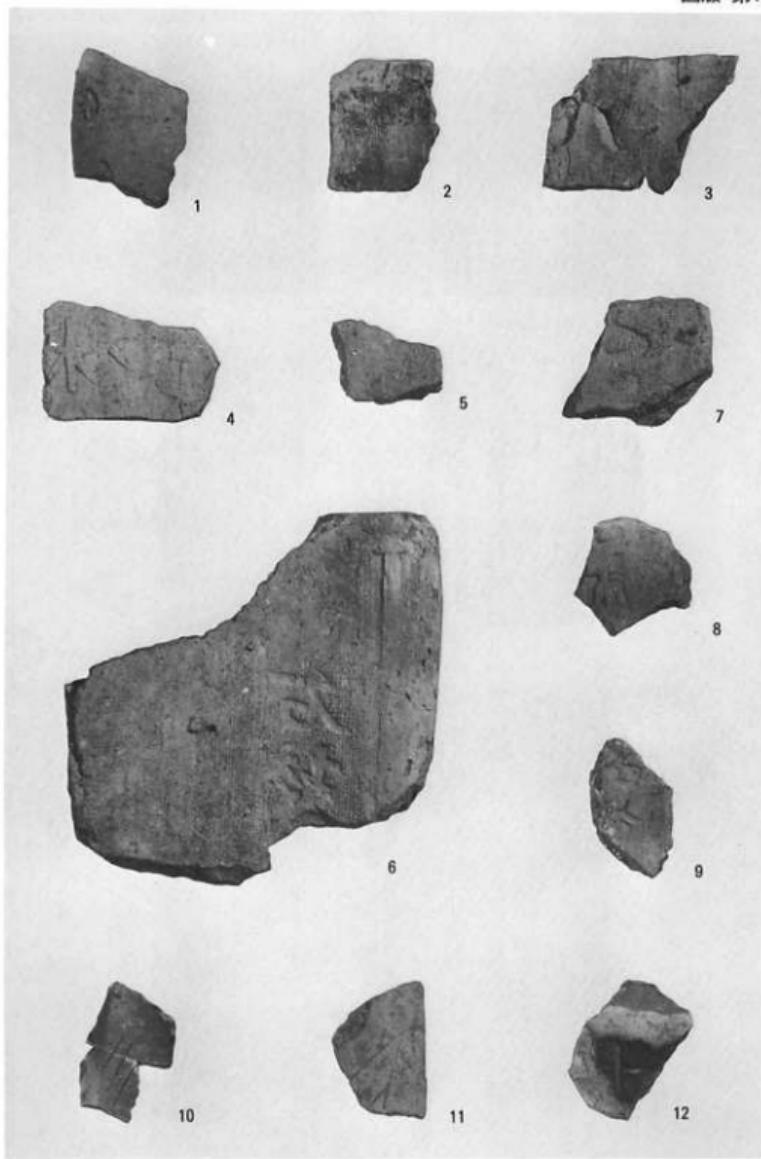


出土遺物 平 瓦(3)

図版 第18



出土遺物 九州系瓦



出土遺物 文字・記号瓦

図版 第20



1



2

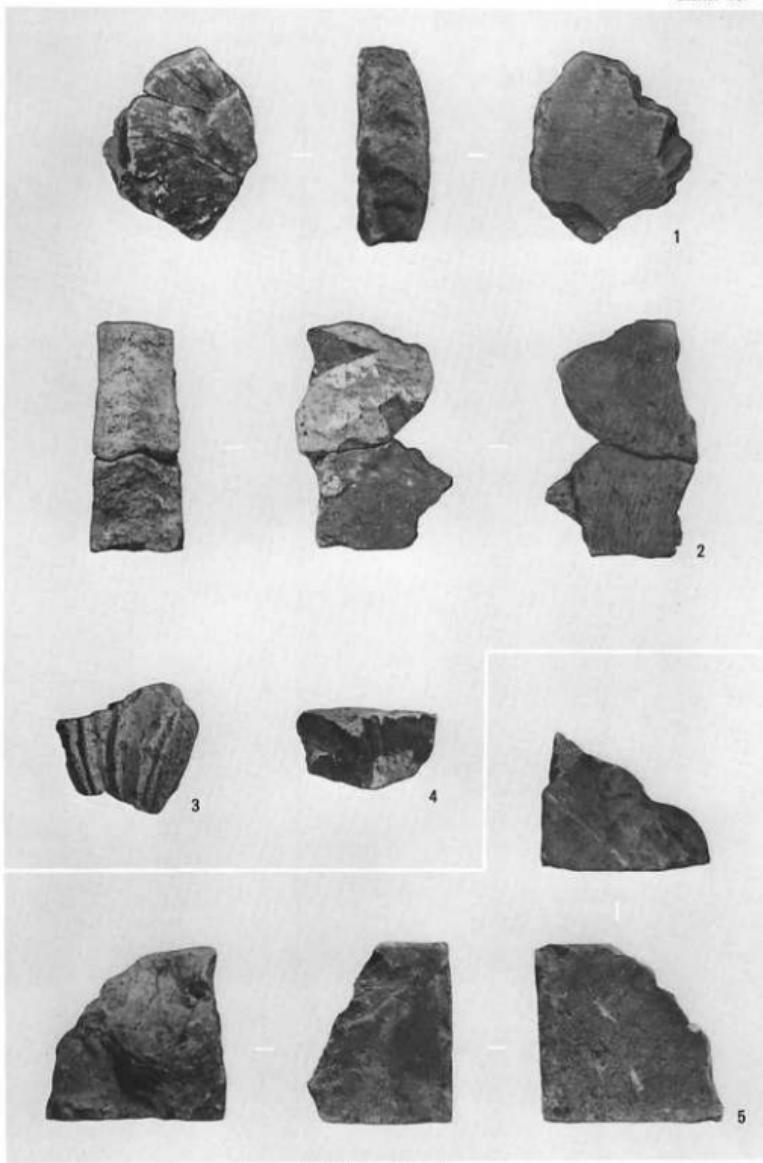


3



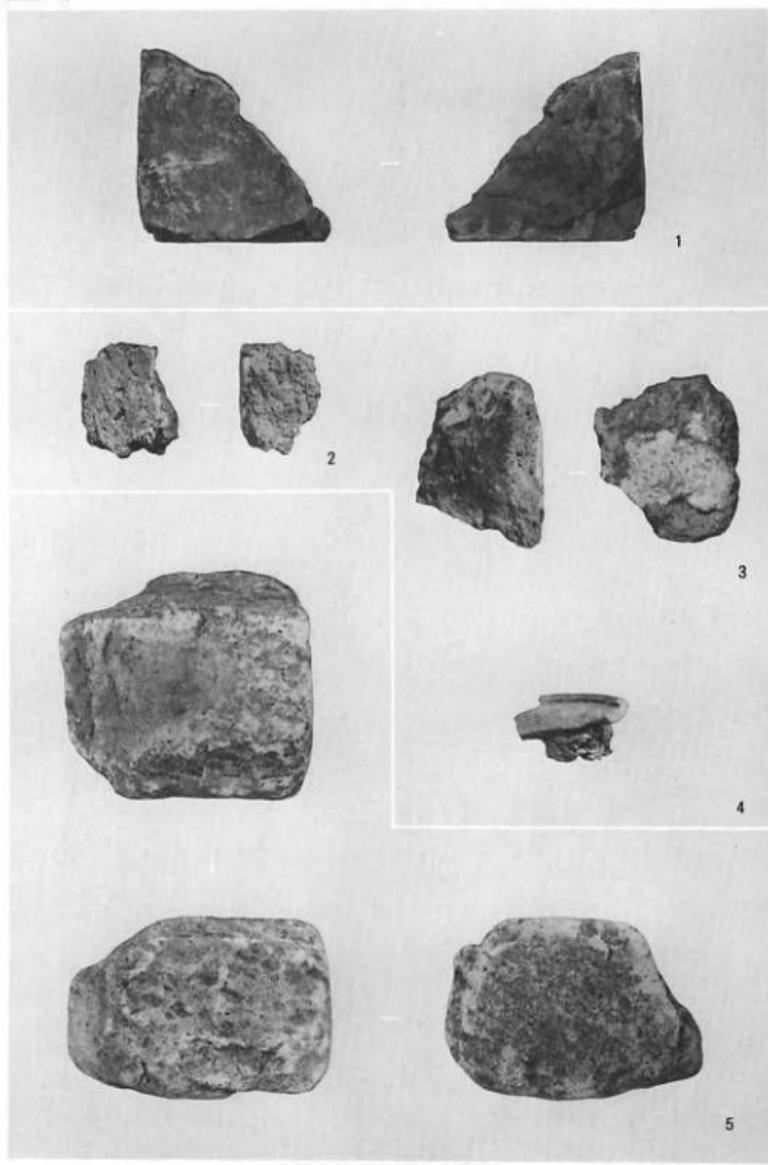
4

出土遺物 突斗・面戸瓦

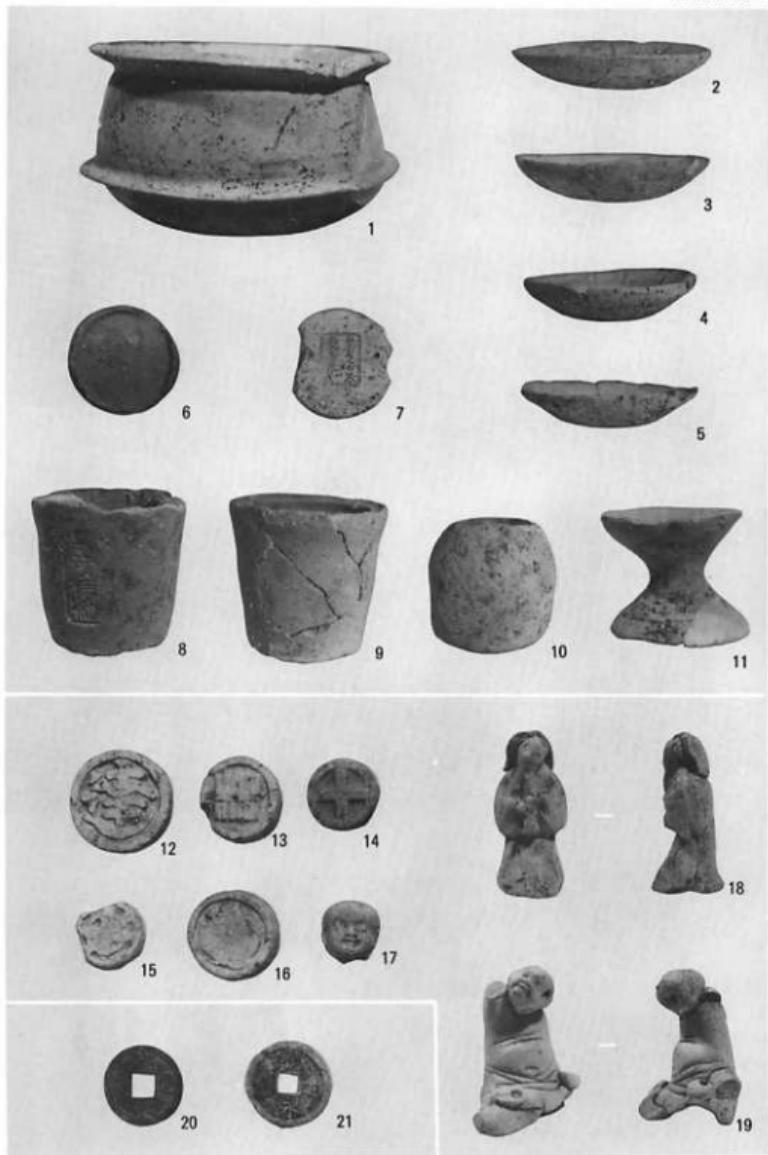


出土遺物 魚尾、鱗

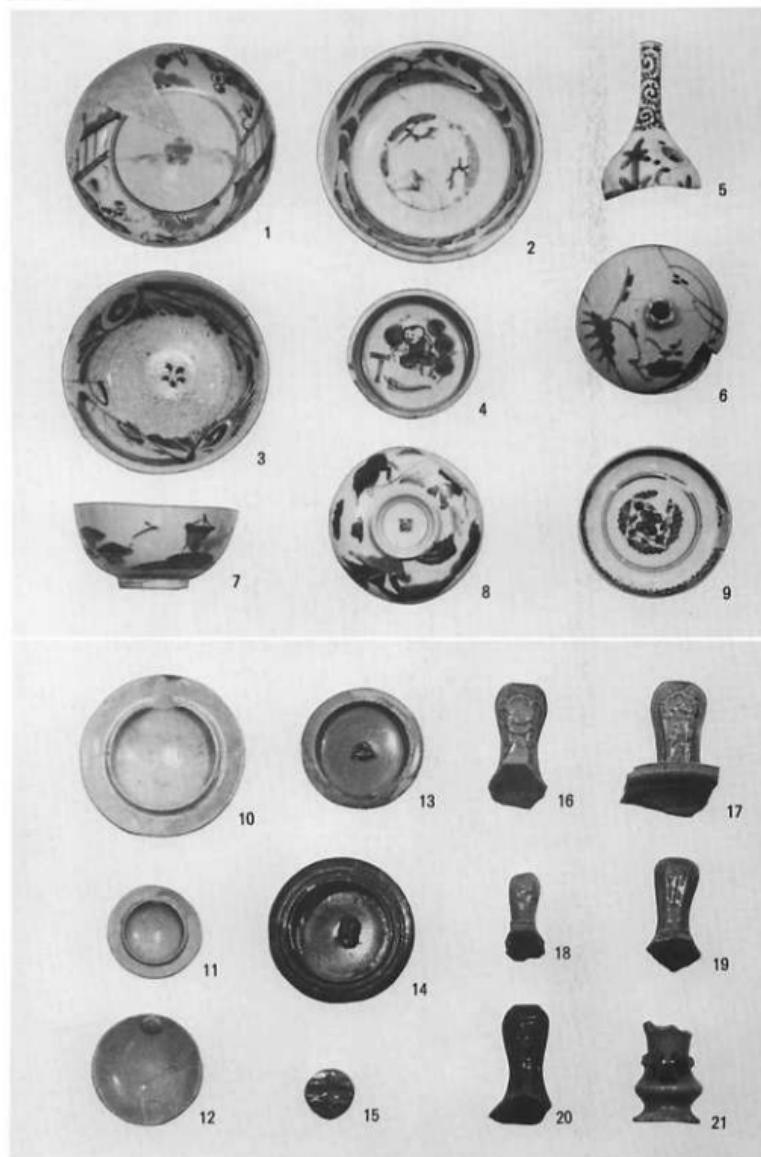
図版 第22



出土遺物 磚、土壁、凝灰岩



出土遺物 土器・土製品類、銅錢



出土遺物 陶磁器類

平安京跡研究調査報告 第9輯

平安宮朝堂院跡

—京都市上京区主税町所在—

発行日 昭和58年9月30日

編集 平安博物館研究部
植山 康

発行 財團法人 古代學協会
604 京都府中京区三条高倉上る
TEL. 075 (222) 0888

制作 ピクトリー社
604 京都府中京区油小路鶴上る
TEL. 075 (221) 1420

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. IX

EXCAVATION OF THE SITE OF
THE CHÔDÔIN IN THE HEIAN PALACE

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXIII